女鑑

明治三十三年四月二十五日發行

第貳百柒號

東京國

女鑑第貳百參號

目録

奥村永福の妻



數十年以前に於ける女大學評論の評論

女鑑、第二百號の臨時發刊にあたり、『如何にして、女子の品位を高むべきか』の題目の中にて、福澤諭吉氏の女大學評論に就いて、首肯し能はざる所以をも論じたりき。久しく、異風のために痲痺せしめられたる人心には、一回の論文、いまだ以つて全く覺醒せしむるに足らざるか。新聞に、雜誌に、猶、本社の所論に疑をおくものなきにあらず。本社は、其等のためには、更に、數十回說明の勞を敢てすることを辭せざるべし。

たゞ、其の前に於いて、先づ二宮翁夜話中なる一節を紹介せむ。これ、全く福澤氏の女大學評論の誤解を正せるものにして、本社の言はむとするところを盡して、また、餘蘊なきものなり。數十年以前に於いて、二宮翁は、あらかじめ、是あることを期せるかの感なき能はず。即ち、之を鈔錄して、以つて諸孃に示し、併せて、世のまどへる人々に與ふ。

或曰女大學は、貝原氏の著なりといへど、女子を壓する甚だ過たるにあらずや。翁曰然らず。女大學は、婦女子の教訓、至れり盡せり。婦道の至寶と云べし。斯の如くなる時は、女子の立つべき道なきが如しといへども、是女子の教訓書なるが故なり。婦女子たる者、能く、此の理を知らば、齊はざる家はあらじ、舜の瞽瞍に仕へしは、則子たる者の道の極にして、同一の理なり。然といへども、若し男子として女大學を讀み、婦道はかゝる物と思ふは、以の外の過なり。女大學は、女子の教訓にして、貞操心を鍛錬するための書なり。夫、鐵も、能々鍛錬せざれば、折れず。曲らざるの刀とならざるが如し。總て、教訓は、皆然り。されど、男子の讀べき物にあらず。誤解する事勿れ。世に、此の心得違ひ往々あり。夫、教は、各々異なり、論語を見ても知らるべし。君には、君の教あり。民には、民の教あり。親には親、子には、子の教あり。君は、民の教を學ぶ事勿れ。民は、君の教を學ぶなかれ。親も、又然り、子も、又然り、君民、親子、夫婦、兄弟皆然り。君は、仁愛を講明すべし。民は忠順を道とすべし。親は慈愛、子は孝行、各々、已が、道を違へざれど、天下泰平なり。之に反すれば亂なり。男子にして、

女大學を讀む事勿れと云ふは、是が爲なり。譬ば、敎訓は病に處する藥方の如し。其の病に依て施す物なれぞなり。

翁の家に親しく出入する某なる者の家、嫁と姑と中惡しゝ。一日、其の姑來て、嫁の不善を並べ喋々せり。翁曰く、是因緣にして、是非なし。堪忍するの外に道なし。夫共に、其の方若き時、姑を大切にせざりし報にはあらずや。兎に角、嫁の非を數へて益なし。自ら省みて、堪忍すべしと、いともつれなく言放ちて歸さる。翁曰く是善道なり。斯の如く言聞す時は、姑必省る處ありて、向來の治り幾分か宜しからん、斯る時に坐なりの事を言て、共々に、嫁を惡く云時は、姑彌々嫁と中惡敷なる者なり。總て、是等の事、父子の中を破り、嫁姑の親みを奪ふに至る物なり。必得ずばあるべからず。





日本女子今後の覺悟（十八）

三輪田　眞佐子

その外に、人は、職業を初對面のものにいふを好まざる傾あれば、人に向ひて、直に、（御身の職業は如何ですか）など問くは、非禮の甚しきものなり。亦、敬語のごときは、決して、亂用せざるを以て、禮となす。若し、その人に不相應なる敬語を用ひんか。反りて、そを侮辱せしむるに等し。且つ、世の慣用に異なる言語は止むを得ざる外は避くべし。たとへば、（何子の君）といふべきを（何子君）といはゞ、意味は等しからんも、音讀は、男子視する嫌あり。故に、一般の慣用に從ひて、かゝるときは、訓讀するを良とするがごとし。その他副詞形容詞などは、用法如何に由りて、人の感情に大なる差異を生ずるを以て、注意せざるべからず。おのれの家に、嘗て、一人の來客あり。一應別れを告げて、門を出けるが、間もなくして、再び來りしかど、おのれは、何事や起りけんとて、忽ち（亦、御出遊ばされたか）と、亦の字に憂の意を含みて挨拶せしを。その人は、その語を厭ふ意に取りけるにや。出でゝ、人に語りけらく、われは再び行きしかば、煩しとや思はれけん。亦なる副詞を用ひられし云々と。されど、おのれは、元來朴訥にして、言語を巧に用ふること能はざれど、今、なほ、それは失禮の嫌なきにあらざりしと悔ゆ。書翰などにても、我が署名を高くなして、宛名を比較上下げて認め、若しくは、我が名を（何子）と

かきながら、人の名に、子の字を省くごとき、或は、人の姓名を草書にて、認め、或は、自らの姓のみをしるして、他人の名のみを書くごときも、禮を欠ぐものと知るべし。

要するに、内に誠あるものは、外に表はるべきを以て、唯心の正邪を辨ふるこそ、願はしけれども、如何せん。人は往々言語の拙きため、誤を生じ、信を破り、遂に交際の道を害する例もあるべけれど、その使用上の注意につきて、一斑をものすること、かくのごとし。

凡そ、人の禽獸と相異なるところは、衣食住の高等なるがためにあらず。人類には、禮節ありて、相互に交り、亦、博愛の情濃かにして、吉凶禍福、相互に同情を表するこそ、禽獸と同じからざる點ならめ。蓋し、禽獸は、各、その好に從ひて、或は、肉を食ひ、或は、菓を拾ひ、其の住むところは、深山幽谷を撰ぶあり。花間綠陰を求むるあり。且つ彼等は、衣といふものなけれども、寒を防ぐに毛あり。身を飾るに羽あるなど、天然の賜豊かなり。故に、逐一、これらを擧げて、考ふれば、反りて、人類よりも、禽獸の衣食住こそ勝るめれ。されど、彼等の間には、禮節なく、同情なきを以て、相互に、私欲を巧くせんためには、骨肉相食むをも厭はざるを以て、交際の道なし。されど、交際の有無を以て、人類と禽獸とを區別するも可なり。

苟も、人類たる所以の分を全うせんとならば、是非とも、身を殺して、仁をなす覺悟なかるべからず。否、人の本性は、社交的なり。故に孤獨の人ばかり、不幸なるものはなし。孟子の衆を樂して樂しむは、獨り、樂してたのしむよりも、愉快と判定せしも、人の本性を洞察しけんによらんか。

思ふに、植物は、培養の効を積まざれば、美花を着け能はざるがごとく、人も、社交的の感情を修養せざれば、孤立を愛して、他人を厭ひ、以て、圓滿なる生活をなす能はざるべし。たとひ、然あらずとも、社交的の愉快を味ふこと能はざるべし。

慈善事業と節儉

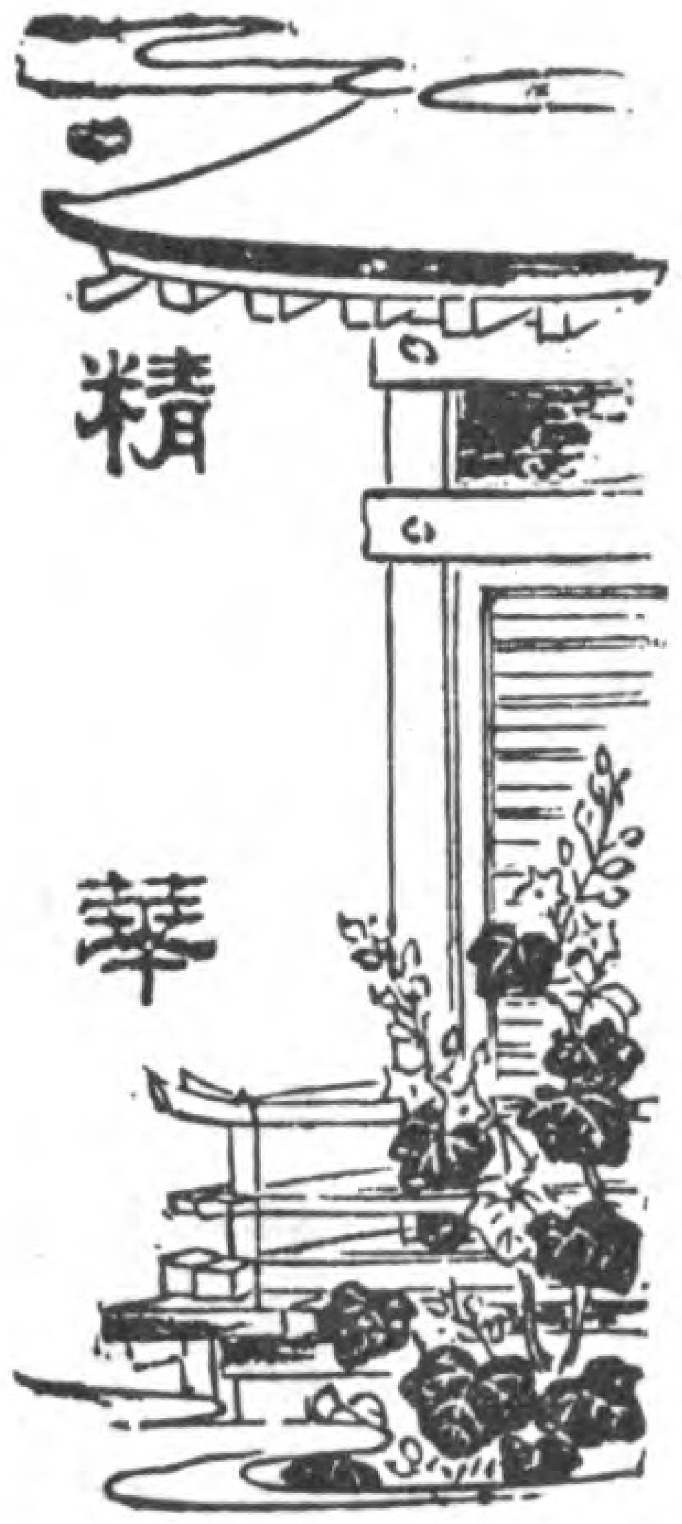
高井毅夫

往昔、高潔を崇ぶ所謂侍氣質の、いまだ精髓を得るに至らずして、たゞに、其の形体をのみ學び、最愛の人々の飢寒に苦むをも顧みず、金錢の如きは、汚はしきものとさへ思ひ爲して、即ちこれ、武士の本性なりと信じ、得々たりしもの多かりし時の弊風、猶、之を今日に傳へて、往々、節儉の德をおろそかにするものなきにあらず。

節儉とは、あながち、金錢を愛しむことの謂にあらず。(吝嗇と節儉との相違の如きは、勿論諸孃の悉知せらるゝ所ならむ。)要は、能くれのれの欲を制し、わがまゝを愼み、正しからざる樂を戒め、不自由に安ずるにあり。さて、一厘一毛の微といへども、其の道にあらざれば、決して、費すことなく、用途理に適ひ、能く自己を益し、人を益し、世を益するに足るがごとき事あらば、千金といへども、たちまち、之に投じ能ふやうに心がくるにあり。この心がけ、即ち、往昔の所謂、侍氣質の精髓にして、今日に於いても、猶もつとも、欽すべき高潔の心なりかし。余輩は、えむ〳〵、諸孃のたづさふべき事業として、最も能く、其の性質に適應し、且つ切實なるは、彼の慈善事業なることをいへり。憐れむべき貧民の敎育、孤兒の養育等、實に國家が、之を諸孃の手に待つところの者

甚だ多し。而して、之を外教信者の手に委ねて、更に顧みるものなきが如き、甚だ、赧然たらざるを得ず。

一家の平和を得むがために節儉せざるべからず、一身の榮譽を保たむがためにも、亦節儉せざるべからず。然れども、余が今日に於いて言はむとする所は、諸孃が、國家に對して盡さゝるべからざる最大急務なる、慈善事業のために節儉せざるべからざることなり。



節操

總て、女子は、一旦人に嫁したらんには、夫の家を、我が家として、浮沈を共にすべし。古に、嫁ぐことを歸るといへり。是、我が家に歸る義なり。人の婦たる者は、夫の家を措きて、他に、我が家とすべきものあらざれど、出入起臥、皆、之を中心とせざるべからざるをいふなり。故に、榮枯盛衰によりて、心を變せず、いかなる艱難に遇ふとも、節操を更ふることなく、益、其の志を固くすべし。然るを、夫の家の、貧苦に陥るを見て、我が身、後來、心身を安んずること能はずと思ひ、或は、夫の無能にして、立身の目途なしとし、或は、舅姑の嚴格なるを恨み、夫の兄弟姉妹と爭ひなどして、自、其の家を出づるもの、世間に、往往之あり。輕侮の人情といふべし。是、一に、夫の家を、我が家と思はざるに生ずるのみ。假令、其の家、貧困に陥り、如何なる辛苦艱難に遭ふとも、是、我が家の事なり。我が身の責なり。我に

逃るべからざる事なりと覺悟して、之に當らんは、人の妻たるもの丶常に務めざるべからざる所なり。

又、人の婦たるものは、常に、品行を方正にし、如何なる變事にあふとも、堅く、節義を守りて、其の徳を汚すことなかるべし。

女は、常に、柔順を主とす。然れども、時變に際しては、利慾にも誘はれず、威武にも屈せられず、死を以て、其の守る所を守りて、其の面目を保たんは、婦徳の最重んずべき所なり。之を、節義といふ。節は、みさをと訓じ、常、守る所ありて惑はざるをいひ、義とは、事の宜しきに適ひて、正當なるをいふなり。もし、楫無き船の如く、風波の隨に漂蕩浮泛して、情慾の爲に、其の操を變じ、利害の爲に、其の心を二三にせば、女子たる面目いづくにかあるべき。

古より、節婦烈女の、危きに臨みて懼れず、刑戮の爲に動かされず、凜然として犯すべからざる節義を持して、以て、其の徳を全くし、名を汗青に垂れて、萬世の龜鑑たるもの、甚多し。事變に遭遇するは希有の事なれども、節義の心は、常に、之を養ひて、平時の事に應用し、萬一の變に處しても、其の道を失ふことなからんことを心がくべきなり。

奥村永福の妻

山本正周

奥村永福といへる士は、前田利家の家臣なり。其の妻なにがしは、性質柔順にして、姿こそやさしけれ。丈夫も及ばぬ勇氣ありし女なり。佐々成政が、織田信雄の命によりて、末森城を攻め來りし時に、永福は、利家の爲めに、此の城に守り居

けるが、其の妻も、また、随ひて、城中に在り。かくて籠城久しきに及べども、利家よりの援軍は、いまだ來らず。城中の軍氣も、日に沮みけるに、永福の妻は、甲斐々々しくも身を固め、手には眉尖刀を携へて、二三人の僮を後に從へ、自ら軍中を巡廻し、惰れる者は、之を責め、疲れたる者は、之を勞り、やがて、援軍も來るべけれど、決して、懼るに及ばずとて、之を諭し、又、自ら粥を炊き、軍兵に勸め 酒を與へて、勞に報ゆるなど、有らん限りの心を盡しけれど、軍兵も、之が爲めに勇氣十倍して、固く籠城なしける中に、果して、利家よりの援兵も着きにければ、共に力を合せて、成政を打ち退けたりとなむ。

うらはづかしき二葉のみどり

田山とり子

何のその岩をもとほす桑の弓。誠だにあらば、鐵の門何かあらむ。岩石また物かは。菅家の歌にも、心だに誠の道にかなひなばと、いとも畏き神々も、祈らずとも猶、まもらせ給ふべきよしを詠まれたりき。

河内國讃良郡三箇村といふは、大阪に近く濱邊つづきの地にて、綱引船人と商人と打ちまじり住ひて、或は、ひたすら利にのみ趨りて、義理人情をわきまへず。或は、たゞ荒々しげに動作ひて、よろづ疎ましげに見え、三箇村といへど、人の心よからぬ村とうたはれぬ。

其村に、病める兩親に仕へて、最も天晴なる幼き兄妹ありけり。兄を予右衛門といひ、妹を小さんといひて、三歳おとりなりき。この二人むかりは、

遂に他村の人々にも疎まれず、可愛しきものに思ひいたはられけり。

家のはしらの兩親は、病がちにのみ、うち過せば、固より貧しきものゝ、いかで事なくてあらむ。醫藥の料さへ、痛しや朝夕の食事さへ、得がたきことも度々になりぬ。いで然らむと、十歳を超えたるばかりの五右衛門、繿縷ながら、農衣股引に身をかためて、田に畑に他人のためにたち働き、僅しき賃銀を得て、たらはぬながらも、一家糊口の途を得るに至れり。言ふことも、未だ覺束なき妹は、兄の留守を守りて、能く兩親に仕へ、炊事のわざ、醫藥のこと、おやしきまでにおろそかならざりき。兄もまた、歸れば晝間の疲勞を事ともせず、直に妹に代りて父母の側に侍き、其のひまには、妹を慰めいたはりて他事もなし。斯くてのみ年月を送りしに、安永七年といふに、父は、遂に死去りぬ。おくれし母は、戀びなげきつる果にや。病勢急につのりて行歩さへかなはぬ樣になれり。不幸の中にて幸ともいふべきは、妹小さん、其の頃は、成人になりて、ます〱能く母をいたはり兄を助けしをもて、あはれむべき親には、生活の難きことをも蔽して知らしめず、苦勞少く世をすごすことを得せしめたり。

小さんは、容貌さへまた最うるはしかりき。然れば、身分よろしき人、富める家などにて、傳へ聞きて、妻に婦にと誘ふもの多かりしかど、母の側を去るに忍びず、兄の上のいとはしくて、いづれへも、皆、固辭して適かず。專心、親に仕ふる道と兄を助くることゝに心を碎きぬ。

家のかたはらに、三四畝許のわが畠ありけり。其地には、母の好める野菜を植ゑおき、空晴れ日もうらゝかなる時は、蓆をしきて、母を請じ、心ば

かりのなれど茶菓などそなへおきて、兄妹して畠の手入する實況を見せ、猶、斯くせばよからむや、斯くせんは惡かるまじやなど、母の教を乞ひて、此上なき樂とせり。

後、五右衛門妻を迎へければ、小きんは、之につかふることも亦至つて忠實にて、遂に、三人して心を一にし、母の一生をやすらかに樂しく見おくりきとぞ。

然しも他村より疎まれし三箇村の村人も、いつとはなく、この人々に感化せられ、荒々しき海人も猶なさけをわきまへ、狡猾なる商人も遂に義理をすてず、よろづ、うるはしき村がらとなりて、今は却つて隣村近郷の摸範となりて永く美名を傳ふるに至れりといふ。

近きころ、世のため女子のためにとて、道理らしき理由を附けて、何の會、くれの會と團体を組織して、或は演說、或は論文と、所謂活潑なる運動を敢てせらるゝ方々多くなりぬ。如何なる頑固なる性質なればにや、然る方のには、耳傾けむとも思ひたゝず。妾は、たゞ、斯の小きんのごとく誠をもて世を感化せむ人を望むこと最切なりや。

家政



女禮稽古の仕方

有住つね子

瓶子酌取様

先、右手に、瓶子の中程を持ち、左手に底をすゑて持出で、下座に抑へ、様子見斗ひ、立ちて進みゆき、御酒をつぐ時は、左手をつき、一進み出

で、左手に、口を取り、口の下に、持すゑつぐべし。つぎたらば、すぐに、口をなし、又、左手をつき、二ひざ程あとへ下り、元のごとくに、持、下座に下り、扣へ居るなり。後世、かんなべを用うれども、むかしは、錫をもつぱら用ひし事なりとぞ。

燗鍋酌取り様

先口を向ふにして、右手にてつるを持ち、左手に底を据ゑて持出で、下座に扣へ、様子見斗ひ、立出で、三尺程手前にひざまづき、御酒をつぐ時は、左手をつき、進み出で、口を向ふにして、左手を口の下にそへて、つぐべし。つぎをはらば、又、左手をつき、二ひざ程あとへ、下り立て、元の所へ座し扣へ居るなり。

御酒戴き様の事

先、神の御前へ進みゆき、一拝なし、扣へ居る。夫より神酒を、土器に受けて、後しづかに戴きてのむべし。御盃の下を捨てず、左の手のひらに受てなむる物なり。

貴人酌受様

貴人側に銚子と盃とを置き、手自ら酌を取りて、御酒をたまはる事あり。其の時は、一禮なし。側ちかく、進みより、御盃を取り、愼て、御酒を受け、少こし退き、愼て、戴きてのみほし、のみをはらば、御盃を銚子のもとに置き、しづかに、一禮して立べし。

臨時の客の應接（十）

三石直子

若し、夜分にて、主人と客人と暇乞すみ、御立の様子ならば、手早く、次の間或は勝手方のラン

ブなり、燭臺なりを、玄關、其の外すべて、客人の出口の壁際へ片寄せ置き、玄關ならば、下座敷へおりて扣ふべし。

客人御立の前後を見斗ひ、其の方の分際に應じて、履物を直しおき、外套樣のものを、次の間に持出しおき、場合を見計ひ着せ申し、傘樣のものは、玄關ならば下座敷へ持出しおき、客人、履物を履きたる後に、兩手にて、柄を客人の右にして出すべし。

婦人は、其の時宜によりて、玄關までも見送るべけれど、大体其にはおよばず、玄關より一間奥にて、客人の通道より二三尺も片脇へすわり、客人へ挨拶して奥へ入るべし。

客人の出行く跡を、柱などにもたれ、或は立はたかりて、覗き居るべからず。また如何樣のことありとも、高聲に笑ひのゝしりなどすべからず。これ極めて客人の感情をわろくし、甚だ誤解を來しやすきものにて、失禮この上なし。

場合により、傘車馬等のことにたづさはりて、玄關までもいづることあれど、然もなき時は、婢僕は皆、家人の後にて沈默りて、時宜をすべし。

折方

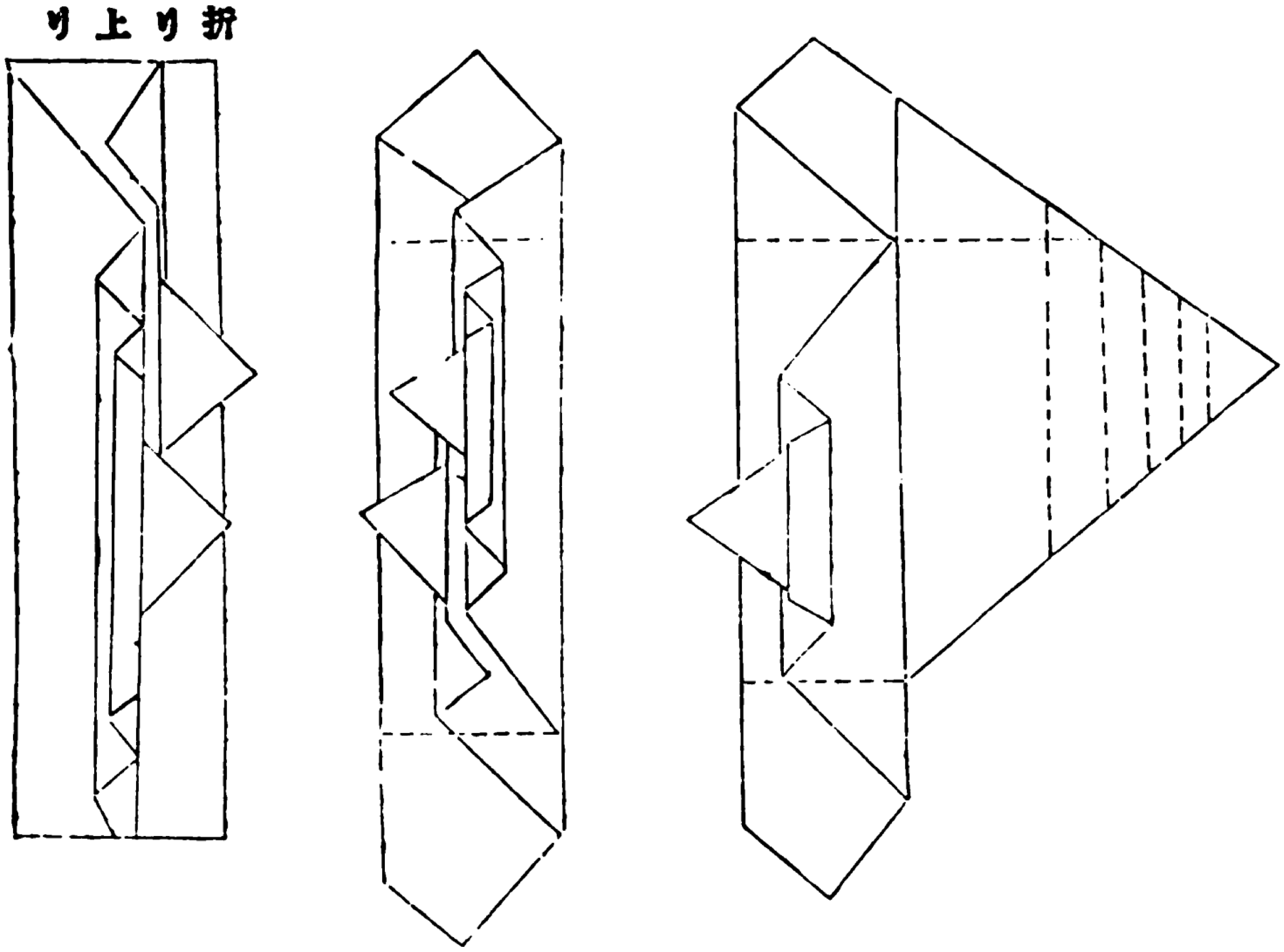
黑はづし二對

有住くわう子

是は、眉を拂ひたる時、其のまわりをなほす筆のつゝみ方なり。

これも、水引をかく。

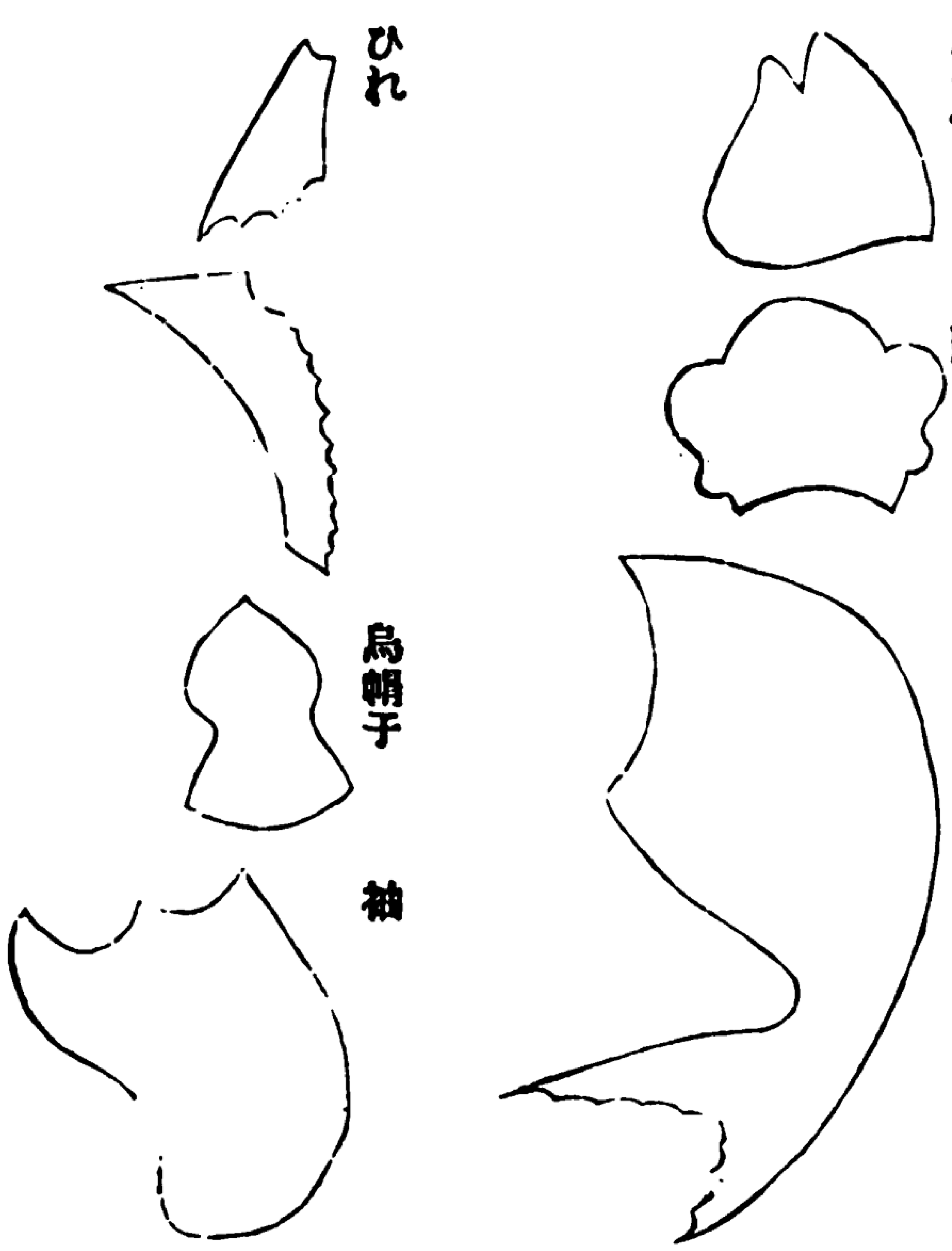
家紋

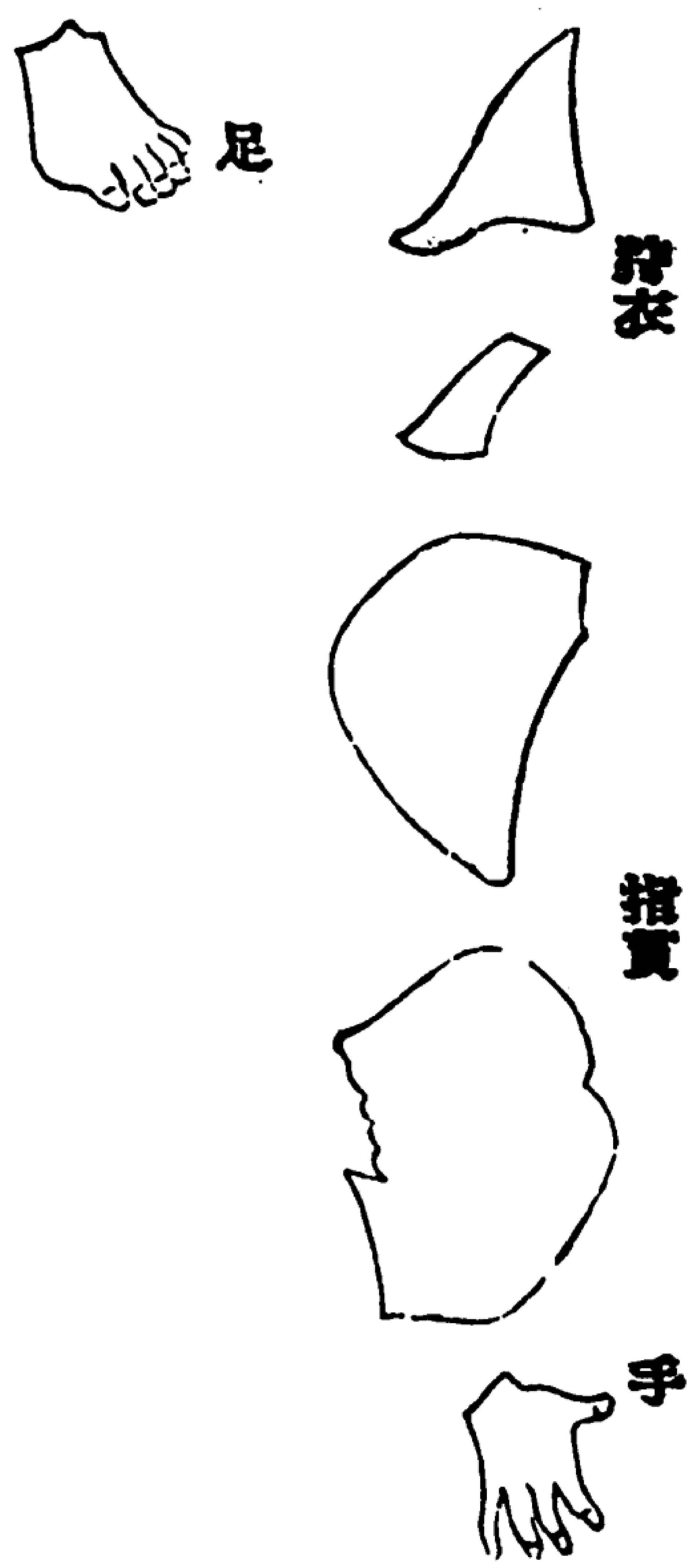


たちぬひ

西山たい子

恵比須に鯛（背負守のつゝき）





右の如き、形を厚紙にて切り、まづ鯛の頭と、身とに綿を入れ、切をはり、ひれには綿を入れず、たゞ切をはりて、鯛の形にくみ合せ、之を、惠比須の手と顔との間にはさみて、持せし如くくみ合すなり。左の圖を見て推しはかり玉ひてよ。但し惠比須の顔は、白絹がよろしく、目鼻をも、書き玉ふべし。手足は、白絹にてはれば、丁寧にうつくしかるべし。されど厚紙のまゝにてもよし。顔手足とも、少しく紅にて、肉色にぬるべし。

（その圖）



だいどころ

木の芽味噌椀盛

きのめを摘み、よく洗ひ、擂鉢にてすりつぶし、

白味噌の、鹽のあまきを、裏漉にて漉し、鍋に味淋を、少し投れ、沸騰たせて、此の中へ、味噌をいれ、かき交せ、煮出しを、少しつゝ加へ、味噌をゆるめ、能程にふりたる時、前に摺置たる木のめをいれ、能く練りて、是を掛物となし、豆腐の小半丁を四つにきり、あんかけ豆腐の如く、湯煮して、椀盛へすくひとり、湯をよくしぼり、其の上へ前にねりたる味噌をかけて出すべし。

筍のきのめあへ

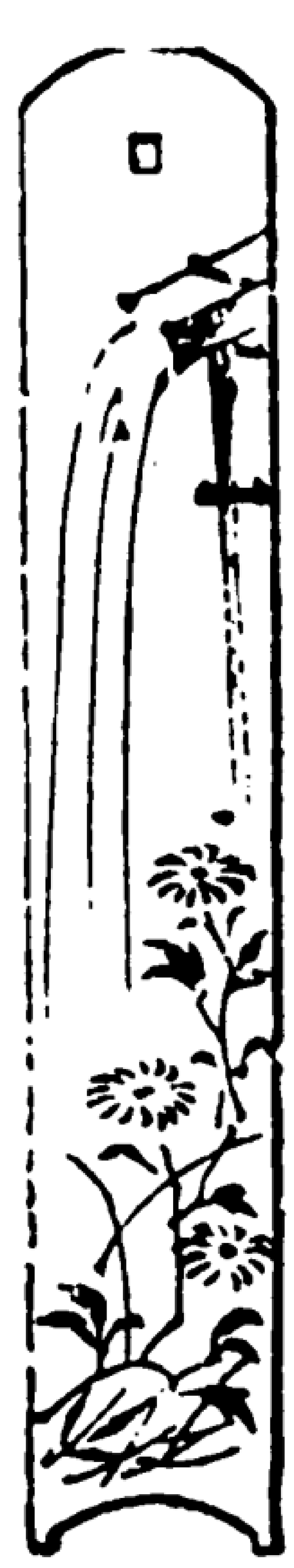
先づ、筍の皮を剝ぎ、能くゆでゝ能程にきり、また湯煮して、淋鹽にて、さつと味をつけ、ざるにあげ、さまし置、きのめをすり、豆腐を絞り、きのめの中にいれ、能くすりて後、白味噌、砂糖等を加へ、能程に鹽梅し、前の筍をいれて、能くあへるなり。

同梅肉あへ

小さき筍の皮を去り、少さくきり、よく湯煮し、和らかになりたる時、ざるにあげ、梅の肉に白味噌、少量を加へ、よく摺りてあへるなり。

筍飯

筍飯を炊くには、鰹節の煮出し醤油、酒等にて鹽梅したる汁にて、炊くなり。水加減は、常の如くにて宜し。又筍の皮を剝き、能洗ひ湯でゝ、又薄くこまやかにきりて、さつと湯煮し、鰹節の煮出し、醤油、味淋等にて、能程に味をつけ、飯を櫃にうつす時、飯に、能く交せて、椀に盛り出すべし。



栄花園

春の草木くさぐさ

○落花　山里深山など、人稀なる處、花の落る、花の都さびしき樣を落花とは云ふ。深山ならで、も、落花のあとは、秋のくれよりも、なか〳〵にものさびし。昨日まで、願くは花のもとにてとまで、なつかしみ、つかのまも離れず、打ちまもりしを、あはれ今朝みれば、また、元の冬がれと見るまでに、殘りもなく散りはてゝ、たゞさむからぬ春風、ときならぬふゞきをさかまくのみ。あなくち惜し。今は、たゞやるせなき念を、

　のこりなく散るぞめでたき櫻花

　　有りて世のなかはてのうけれど

の古歌を口ずさみて、いさゝか慰むるあるのみ。

○鷄頭樹　櫻花にかへて、朝な夕な、吾等をなぐさむるものは、若楓のゆかしきさまとはなれりけり。何の庭も、何の公園も、之あらざるはなし。近よりて、詳しく看れど、げに蛙手の名の如く、いと少く、らうたげなる手の形あり。此の葉や、夏にいたれど、いたる所を、青山になし、秋風さびしく、霜露おくころより見るかぎり、銀世界となるまで、滿山唐紅にそめて、立田姫の錦の衣などめづる紅葉も、此のかへでなりけり。

　四月手入すべきもの（2）

過貼すべきもの

杵　かくれみの　をかたまの木　柃まびは

山茶　桂　茶梅　なんじやもんじや（榛の一種）

女貞　交讓木　櫟　海桐花　水木犀　もじのみるい

壓條すべきもの

はくちの木　夾竹桃　いらすちかごむ　てんにんくは　梔子　石榴

下種すべきもの

梧桐　梔子　山茶　茶梅　紅花　小茴香　漆

澆灌は、凡そ、草木の未だ、盡く、萌を發せざるものは、皆肥を澆ぐべし。

整頓すべきものは、先、菖蒲盆を、清明後に出し、又、柑橘類、及び、桃絲竹、皆、是月の中旬より出すべし。且つ柑類の地に植ゑたるものは、霜除を去り、根邊の雜草を除き去るべし。又、下旬に、茉莉幷に、各種の蘭を出すべし。

菫　菜

菫菜は、多く、我が邦、山野に自生する種類にして、濃紫色の花を開くものを通常とし、其の他、淡紫色、帶紅白色、雪白等の變種多く、一種香菫菜と稱し、芳香を放つものあり。外國より傳來せる香菫菜は、花八重にして、淡紫色、及、白色の二種あり。香氣、頗る高く、花大にして愛すべく、在來の普通種と異なり、暖濕なる地を好み、親株より、一種の柔莖を生じ、地に匍匐し、發根して、繁殖するの性あり。秋彼岸に分植し、水苔の類を被ひ、常に水分を保たしむれば、能く繁茂抽莖するものにして、火山の灰より成れる地なれば、時々水を灌くも、亦能く繁茂せしむるを得べく、冬期温暖にして、日當りよき場處を撰み栽植すれば、十二月、一二月頃、開花するものなり。肥料は、油粕、又は、人糞尿の稀薄なる水肥を與ふれば可なり。

三　色菫菜

三色菫菜は、普通の菫菜と等しく、早春開花するものにして、菫菜よりも、花形大なれども、香氣少く、頗る、艶麗愛すべきものなり。此の植物は、



（香すみれ）



（三色すみれ）

夏季、光線の直射を忌み、肥沃にして、少しく濕潤なる砂地を好むものなれども、本邦の土砂中、殆んど生育せざるの地なかるべく、排水の宜しからざる地は、繁茂し難く、秋彼岸頃、移植し、堆肥、人糞尿等を施し、置かば、翌春早く、開花すべく、暖處に栽植せば、冬月開花を促さしむること容易なるものなり。亦種子を播種するには、中夏、又は、秋彼岸に行ふべく、嚴寒地にては、冬期稻藁の類を被ふて、霜害を豫防すること必要なり。又、三色菫菜は、其の名の如く、黄紫白の三色の花なれども、其の配合如何によりて種々の變種あり。

ヂヤイアント、トリマージユー、大花、葉の上に抽出、三大點あり。

シヲドリコル、上瓣青藍色外邊紫色、下瓣白、又は、黄色地に深紫色點あり。

ロード、ビーコンスフ井ールド、大深輪深紫色、上瓣端、白色

純黄、純粹鮮黄色

學藝

國文學講義

磯野德文

（四）（前回の續）

さて、相まじはるの道をいはゞ、常に、よろこびとむらひを述べ、やみわづらひを問ふは、定りたる事といひながら、もつとも、禮義をつくし、眞實のこゝろをいたすべし。水火、盜賊、不慮の難あらば、互に合力して、隨分すくひたすくべし。行跡のあしき人をば、いく度も、ねんごろに諫むべし。賢德ある人をば敬ひ、學問ある人をば親しみ、材藝ある人をば、ほめあらはし、無能なる人をも敎へ誘き、あらそひにおよぶ者をばとりあつかひ、愁ひにしづむ人をも、とひなぐさめ、孤兒、寡婦、老病、かたわなる人をば、いたみあはれみ、困窮無力の人をば、賑はしすくふべし。しからば、一鄕の人、おもひ合ひて、一家の親しみにおなじからん。いかで、和睦せざる事やあるべき。

●相は、アヒ、道は、ミチ、常は、ツネ、述べは、ノベ、問ふは、トフ、定りは、サダマリ、事は、コト、禮義は、レイギ、眞實は、シンジツ、水火は、スヰクワ、盜賊は、タウゾク、不慮は、フリヨ、難は、ナン、互には、タガヒに、合力は、ガフリヨク、隨分は、ズヰブンとよむべし。

○さては、サアリテにて、サウアリテ（然而）のこゝろ、かくてとは、此彼の別あり。さては、然うありて、かくては、斯うありてといふほどの意なれば、おのづから、其の差あることをさ

とるべし。前章をうけていへるなり。相まじはるの道をいはゞ、相は、合ふこゝろにて、此方よりも、彼方よりも、仕合ふをいふ。まじはるは、交るにて、マジリ合フこゝろなり。交際するをいふ。のの字をおきたるは、誤なり。まじはる道といひて、の文字はなくてつゞくるが正格なり。この誤は、もと、漢文を直譯したるよりおこれるなべし。道は、必、ふむべき、正しきすぢをいへり。よろこびは、喜悦にて、心に善く感ずるをいふ。こゝにては、慶賀の義なり。とむらひは、こゝにては、弔慰の義なり。訪ふと同じこゝろにて、凶事あれば訪問するが常なるよりいひならへるなるべし。述べは、其のことばをいひのぶるなり。やみわづらひを問ふのやみは、病むなり。わづらひは、煩ふなり。病にかゝりて煩へる人を見舞ふをいへり。禮義の義は、儀とある本よろし。禮は、人とまじはるに、ふかく心に敬ふをいひ、儀とは、作法に、其の則を守るをいふ。つくしは、盡しにて、あるかぎりをするをいふなり。眞實のこゝろをいたすは、譌らず飾らず、誠の心をもて、とり行ふなり。水火は、洪水の災、火の災などをいふ。盗賊は、ぬすびとにて、即、盗難をいへり。不慮の難は、おもはぬ難義なり。合力は、力を合するなり。隨分は、身の分限に應じてといふこゝろにて、身のほど〳〵に隨ひてするをいへり。すくひたすくるは、救助するなり。▲文意はよくきこえたり。

●行跡は、カウセキとも、ギヤウセキともよむべし。人は、ヒト、いく度は、イクタビとも、またいくドともよむ。諫むは、イサム、賢德は、ケントク、敬ひは、ウヤマひ、學問は、ガクモ

ン、親しみは、シタしみ、材藝は、サイゲイ、無能は、ムノウ、敎へ誘きは、ヲシヘミチビキ、者は、モノ、愁ひは、ウレひ、孤兒は、コジ、寡婦は、クワフ、老病は、ラウビヤウ、困窮は、コンキウ、無力は、ブリヨクとも、また、ムリヨクともよむべし。賑はしは、ニギハはし、一郷は、ヒトサトまたは、イチガウとよむ。合ひは、アひ、一家は、イツカとよむべし。

○行跡は、ふるまひの跡の意にて、俗に、行狀または、身持などいふにおなじ。あしきは、惡しきにて、善からぬなり。いく度は、再三度に限らぬをいふ。ねんごろは、ネモゴロの音便にて、懇の字にあたれり。誠心をもて、心切にするをいへり。諫むは、說き諭して止むるをいふ。非行なることをさとらしめて、改めしむるなり。この語意をおもふに、イサムのイは、勢をそへ

ていへることぞ、●サは、狹にて、せばむる意、●ムはしかするこゝろのことぞにて、よからぬ心を、いひ狹めて、善き心にかへらしむる義なるべしと思へど、いかゞあらん。なほ考ふべし。賢德ある人は、才智善行をそなへたる人をいふ。敬は、さきにいへり。學問ある人は、物事を學び問ひて、其の道を知れる人、親しみは、シタは、裏の義にて、即、心をいひ、シミは、染みにて、心に隔てなきをいふ。材藝は、才と藝となり。才は、心のはたらきにて、能力なり。藝は、しわざにて、才能をいふ。ほめあらはしは、其の才藝をほめて、世にしらしむるなり。無能は、愚なり、敎へ誘きは、敎へて、善き方に、手引して誘くをいふ。あらそひにおよぶ者は、いひつのりて、喧嘩に至る者ども、とりあつかひは、いひなだめて、和解せしむるなり。愁ひ

にしづむは、ものを思ひ案じて、心をいため、何となく引きたゝぬなり。とひなぐさめは、此彼と問ひて、慰むるをいふ。ナグサムは、和さむにて、凝りたるを和らかならしむる意なり。おもふに、ナの行には、親和の意あり。俗に、同意を求むるに、ナアといひ、ネーとひ、ノウとふ。又、ヲンナ(女)、ナゴム(和)、ナカ(中間)、アニ(兄)、アネ(姉)、ヌル(塗)、ネバル(沾)、ノバス(延)ニル(煮、似)、ナグ(風などの)ニギヤカ(賑)など擧げていはゞ限もなかるべし。孤兒は、ミナシゴともよみて、親、兄弟のなき一人子なり、寡婦は、ヤモメともよむ、夫を失ひたるひとりもの丶女をいふ。ヤモメは、ヤムメ、即、止女の義にて、一度、夫にそひて、女たる務を果したれど、其のつとめのやみたるこゝろなり。この語のこゝろよりおしても、女は兩夫に見ゆまじきは、我が國風なることを知るべし。老病は、年老いて、病めるをいふ。かたわは、カタハとわるがよし。かたわは誤なり。片端の義にて、身のとゝのはぬをいふ。即、盲、聾、啞、跛などをさせり。いたみあはれみは、我が心に、痛ましと思ひて憐むなり。困窮は、衣もの、食もの、住む家、不足にて、苦しむをいひ、無力とは、我が一身を支ふるに、力とぼしきをいふ。賑はしすくふは、物を惠みて救ふなり。ニギハヽシは、物不足にて、安き心もなきを、物をあたへて足らしむれど、心もゆるみて、和らぐよりいへり。ニギハシキ(賑)と、サワガシキ(騷)とは、二つながら、靜ならぬこゝろあれど、自、差別あり。騷しき方には、荒々しきこころあれど、賑しき方には、同じのゝしりながらも、親和のこゝろをふくめり。これにて、其

の意をさとるべし。おもひ合ひては、互に頼もしく思ひあふなり。一家の親しみは、親子兄弟の親しみなり。いかで云々は、和睦せるざことあるべきか、和睦せざることなし。即、和睦すべしとなり。ことやのやは、かとあるが正しかるべし。▲文意は、明なり。

漢文學講義

佐々木天游

楠公肖像記

津阪東陽

贈正三位左近衛中將楠公圖像。世俗所二傳寫一。率皆無稽。遍募二諸四方一。終未レ足レ取レ信。太史公所レ謂釣レ之未レ睹二容貌一者也。』後閲二源筑州退私錄一。曰河內石川水分社。楠氏世所二崇拜一。左側有二楠公祠一。奉二祀木像一。束帶儼然。當時遺影。稱二南木明神一。正平帝所レ賜號也。』余於レ是拆レ牌雀躍。潔齋以往。請下典レ祠者上。啓レ龕瞻拜。面相衣紋。精爽如レ在。敬摸寫以歸。積歲所レ祈。竟獲二冥助一。爲レ喜可レ勝言耶。』

贈正三位左近衛中將楠公の圖像、世俗の傳寫する所、率ね皆、無稽なり。遍く、四方に募りて、終に未だ信を取るに足らず。太史公の所謂之を釣うするに、未だ、其の容貌を睹ざるものなり。後源筑州の退私錄を閲するに、曰く、河內石川水分社は、楠氏の、世に崇拜せし所にして、左側に、楠公の祠あり。木像を奉祀す。束帶儼然として、當時の遺影なり。南木明神と稱す。正平帝賜ふ所の號なりと。余是に於て、牌を拆て、雀躍し、潔齋して、以て往き、祠を典るものに請ふて、龕を啓きて、瞻拜す。面相衣

紋精爽在すが如し。敬んで摸寫して、以て歸る。積歲の祈る所、竟に冥助を獲たり。喜びたる勝て言ふべけんや。

贈正三位左近衞中將。楠公（公は尊稱なり）圖像で、正成公の肖像と云ふものは澤山ありますが、世俗の間に、相傳へ寫して、流布してをります所のものは、大概（率は大方と云ふことなり）どれでも、皆據處のなきもの計りで、（稽は考なり。無稽は考ふるなしと云ふ意で、ふたしかのことなり。）一向あてになるものがない。遍く廣く、楠公の肖像をそこ〳〵と募り求めてみるけれども、終に、とう〳〵、たしかなものがないので、此ならば、たしかと信ずることが、出來ぬもの計りてある。（諸は虛字にて。於の字、之の字と稍同じ義なり。）太史公の司馬遷が、之を釣うするに、誰れでも、一樣に、其の人の容貌をみざる所のものの計りで、唯、想像して、其の姿を寫すものばかりだから、一向に信ずべきものがないと言れたと、同じ通りで、澤山に楠公の圖像がありますけれども、皆、楠公の容貌をみたことのなき、後の人が、想像して、こしらへたものだから、一もたしかと信ずべきものがないのである。）太史公とは、漢の史官、司馬遷のことにて、釣レ之云々は、史記に見ゆ。）此所迄は、世に楠公の圖像と云ふものが、澤山あるけれども、一も信ずるに足るものなきを云ふ。

そこで、四方に遍ねく求めますけれども、一向に信ずべきものを見當りませんでしたが、後に源筑州。（新井筑後守君美、即ちかの有名な白石先生のことなり。）乃新井白石先生の書れました、退私錄と云ふ書物を讀んでみました所が、（閱は、けみしみると云ふことなり。）其の中に河內國石川鄕に祭

りてある、水分神社は、（水分社は、天之水分神を奉祀す、）楠氏の代々崇め尊び拜み祭られた所で、（楠公の歌にも、久方の天津日嗣の安かれと祈るは天の水分の神とあり。其の代々崇拜せられし所たる、推して知るべし。）其の水分社の左の側に、楠正成公の祠がありまして、其の所に楠公の木像を奉祠で、祭りてありますが、其の束帶儼然で、束帶の、御裝束をして、居られるおすがたが、誠に威めしくして、此こそは、當時（當時は、そのかみと云ふこと）乃ち楠公、そのかみ、遺れる影形にして、世の中一般に、流布してをる、楠公の肖像と云ふものとは異なりて、たしかに、其の時の遺像で、尤も信ずべきもので、南木明神と稱へまつりてありますが、（楠の字にちなみて、南木明神）、其の神號も、勝手に後の人がつけたものでなくして、後村上天皇（正平は後村上天皇の御年

號なり。故に正平帝と云ふ。）の正平帝が、下し賜はられしもので、尤もゆかりの正しきものであるのぢやと、（也は、決語俗語の所謂ぢやと云ふ程の意）云ふことが書てありました。河内より、此所迄は、退私錄中の辭で、信を取るに足らざる中に付て、信を取るに足るべき肖像が、河内國南木神社にあると云ふことを、退私錄によりて知りたと云ふことを述べて、自分が尤もたしかな、楠公の肖像を得るに至りたる所以の、來歷を叙したものであります。

そこで、右の樣な事柄が、退私錄に記してありたものですから、余（余は作者自身なり。）自分が、尤も信ずべき楠公の肖像のある所を知ることが出來たと云ふもので、喜んで足の髀を拆ちた、いて、雀躍と飛立ち躍りまして、（拆髀雀躍は、喜ぶことにて、莊子の在宥篇に、鴻蒙拆ㇾ髀雀躍不ㇾ輟

とあるに本づく。脾は髀に同じ。)身を清潔にし、齊戒即ち、ものいみして、心も清淨にし、そうして、河内國石川郷南木明神の祠に至りまして、(以は、虚字。助語なり。)祠の事を主りてをります所の、社人に、相談を致しまして、祠の扉を開きあけまして、(龕は字書に塔下室、又、浮屠搭などとありまして、俗に云ふはこらのことなり。)瞻視即ちみあげ拜みました所が、成程白石先生が、束帶儼然當時遺影と言れた通りで、面相と、其の顔面のすがた、衣紋即ち裝束の紋理が、精しく爽やかに、はつきりとして、ちようど楠公が生きて御坐られる樣にありまして、世俗の傳寫致してをりますものとは、遙に異なりて、誠に信ずべく、貴ぶべき所のものであります。そこで敬ひ謹みて、一本を摸し(摸は、倣ひ學ぶこと)寫して、其の肖像の通りに雛形をとりまして、さうして歸りて

まゐりましたが、之に依りて、何年も〳〵長い間、(積歳は、歳を積み重ぬることにて、何年も〳〵と云ふ義なり)どうか、尤も信ずるに足るべき、楠公の肖像を手に入れたきものであると、祈り求めてをりました所の願心が、竟につまるところ、神の助を得まして、(冥は幽冥の義にして、神理は幽冥にしてみるべからざるが故に、鬼神の御助を冥助と云ふ。)個樣に精爽在すが如き、楠公の肖像を寫し取て、手に入るゝことが出來ましたがなんと喜ばしきことではないか、其の喜びたることは、言語の、能く得て言ひ悉すことでない。乃ち喜びのあまり。其の來歷を筆にしたのが、即ち此の文であります、(耶は歟辭、畧、哉の字に同じ。唯、哉の字に比すれば、悠長の趣味を帶ぶ。)余於レ是より、以下、耶に至るまでは。尤も信ずべき楠公の像を得て、喜のあまり、此の文を草し

た次第を述べたのである。



漫録

童女敎（其の一）

序

毛詩周南桃夭の篇に、女子他へ嫁して、その家人に宜しきを美め、禮記には、父母舅姑につかへまつるの道を明し、猶亦、内則には、可なる者を擇むで其子の師とせよと言へり。是也。小女の人と成て、貞婦となれるのためしへ、濱の眞砂の數々あれど、唐の書は、文字かたく、義理遙にして、男子すら、たやすく曉しやすからず。況や女子をや。人生ながらにして是を知るものあらず。豈、まなびずしてそのことはりを辨へんや。こゝに、高柳昌功先生といふ人あり。常に、風雅の道を好てあそべること年久し。其學べるや、唐の大和の書はさらなり、廣く梵經の眞理をさぐり、行餘刀の日一冊を綴り、童女敎と名付て、家訓とし、又、したしき兒女に敎へて學ばしむ。予、一日、その書を見るに、手のまひ足の踏ことをしらず。忽然として歎じていはく、嗚呼先生は誠に郷の善俗世の良材なり。陰德、いまだあまねく、人のしらざるは命なりとやせむ。此書、童女の爲のみにあらず。男女、すべてかくのごとき敎によらば、身をおさめ、心を正しうするの道、何事か是にしかむ。しかも、たやすき大和文字を以、聖賢の敎を貫ぬけりと言へば、先生笑ていはく、しからば、汝、序をつくりて書の始に題せよと。予がいはく、

老兒久しく風雪流水に逍遙して、孔孟の仁義の道を忘たり。他の賢徳の人を待給へと言へば、先生又曰く汝は心の友なり。たがひに志しを知れり。あながちに、人にもらすべき書にしもあらず。必、辭することなかれと。その言葉もいなひがたく、また、おもふことといはぬは、はらふくるゝわざなりと、古人も言捨ぬれば、筆にまかせて書やりすつるも、誠に、散木の陋質を恥ざるの嘲、まぬかれかたしといへど、愚翁が一睡の寢語なれば、誰か是非を論ぜんや。よしあし難波の春も夢と暮行彌生の末廿日あまりの比、ひとり灯のもとに硯をならすも、また捨やらぬ老の世話にこそ。

于時享保十四酉晩春廿日余

柳陰堂前田氏

水雲翁序

一 手ならひおこたることなかれ。手あれども物書ことならず、目あれども讀ことならずば、あたかも、盲かたわのごとし。たとひ、千世萬代の遠きむかしも、書をよめば目の前に顯れ、山海萬里のあなたも、文に用事を達するは、手ならひの徳ならずや。

一 玉みがかざれば光なし。心たしなまざれば惡人となる。我より能人にしたしむべし。友をゑらびてあそばざれば、身いやしくなる。香を賣者、おのづから身かうばしく、魚をひさぐものは、衣もなまぐさし。善惡はなるゝにしたがふて、うつりやすき物なり。

一 常に嗜なければ、人前に恥あるべし。能ことは、あら〳〵しくも、一遍ならひて心得べし。言葉はしたなきは聞にくし。こゝろばへ人がらは、ものいひたるけはひにこそ、物越にもしら

るれど、よし田の兼好もいへり。たとひ、千々の寶にあきみちたりとも、心くらく、ふつゝかならむ、貧女の心やさしきには、いやしまれめ。一しつと深きは、家おさまらじ。なを、不縁のもとひなり。たとひ、こゝろにうらみあるとも、色に出さず。（色にいださぬやうにさは、いさあかぬ言ひざまなり。うらみの心など露もたぬやうに心がくべきこさなりかし。）何となく、にこやかにして打過ぎぬべし。志みちをまもらば、道にはおざるおつともあらじ。紀の有常がむすめのこゝろ、よきかがみなり。

諸國孝義錄（大和國下）

孝行者善兵衛

添上郡和泉村の百姓善兵衛は、もとより貧者なるが、父仁兵衛、見ぐるしき病にかゝり、母も眼やみけるを、その身は人につかへながら、夜にもなれば、親をかへりみむ事をこひ、さむきころ、ふすまうすければ膿血の中に寝て、わが身をもてあたゝめ、常に食物をすゝむるにも、膿血の、あたりにこぼれたるあまりをあつめて、おのが食となしぬ。あひるは郡山へ柴賣にゆき、ともなひたるものは飯酒などのみくひすれども、善兵衛は、わづかに餅ふたつをかひて一つはおのれが腹をやしなひ、一つはもちかへりて父にすゝめしかば、郡山の邊にゆくときけば、父もたのしみまち居けるを、見きゝせしかたへのものは、皆なみだおとして感じあへり。仁兵衛の母の大坂に居けるも、世をわたるわざ乏しくて、仁兵衛がもとにかへり來りしかば、をる所をわかち、すませしに、後には、あゆむこともくるしくてありしを、よくたすけやしなひしが、明和四年正月にうせぬ。母のやま

ひも、日にそひて重りしかど、その身のつとめの給銀をもて療養をなさしめしかど、ある目醫師の廿日のほども、こなたに住て療治せばよろしからんといふに、その身一錢のたくはへだになければ、主の平次郎に、わくる年の給銀の半をこひ、廿日限の療治せしが、そのしるしなくて、つひに目しゐとなりぬ。平次郎もあはれがりて、銀そこばくをあたへしかど、人につかへ居ては、目しゐの母やしなひがたしとて、家にかへりて、やしなひしに、同七年六月に五十七歳にてうせぬ。領主も、かれが孝行をきゝ、このさとびとのをしへともなれかしとて、善兵衛が身を終るまで、米をあたへて褒美せしとぞ。



主従心得草後編（承前）

諏訪 忠元 寄贈

いくたびもかんがへて、急度思ひ定めた事も、明日になるとがらりとかはる、此の心のかはるにもこまる事なり。心のかはる人は、眞實のない人なり。末は頼にならぬ人なり。京二條の水底といふ女が、男の心のかはりたるを恨みてよみたる歌に〇蜘蛛の糸にわれたる馬はつなぐ共、二またかけし人はたのまじ」とよみしも間違なし。世の中はかやうな人たけなればよく心得て交るべし。今の出來合の夫婦のやうに、おまへの心と、私しが心と合せて見たればしつくりやんはりよくあひましたと、手まり歌を見たやうな、仲人なしの夫婦にかくのごとくのけんくわ口論あり。況や、其の外の寄合人足傍輩同士の押付夫婦は、我他彼此ある筈と

しるべし。一生の内には、色々な事あれば、平に、堪忍をし、辛抱をして、中よく暮すべし。樂に身勝手我儘をせず、唯人の爲になるやうにすべし。主人は、家來の行末を思ひ、一軒の主となるやうにせんと思ふべし。家來は、主人の御爲にさへなれど、我が身の上の事は少しもかまはぬといふ氣になり。主人大事を忘るべからず。主人の御用をよくつとめなば、よい家來じやと人にもはめられて、よい出世をすべし。又夫とは、女房の爲を思ひ、女房をいたはるべし。女房は、夫の爲を思ひ、我身の事は、あとへまはし、夫の苦勞を助くべし。親子兄弟に至る迄、我が勝手、我がひいきをやめて、唯人の爲によからん事を思ふべし。人の障りとなる事は、決してせぬやうにすべし。左すれば自然といば相持となつて、樂に世を安心にくらすなり。我さへよければ、人の事は、かまはぬといふやうな心を持べからず。是は損あつて、益なし。夫故佛神聖人には、決してなき御心なり。此の儀をよくしつて、樂に中よく暮すべし。主従親子兄弟、夫婦、いば相持にすべし。樂に中よく暮すほど安心な福徳はなしとしるべし。

消息文十二種

隨菴生

（二）徳川家康より秀忠におくりし文　（承前）

（孫の養育について）

一幼年の者、得て、氣に入らぬ事を申し聞せし時、側に有りあふ器などを、なげはうり、物を損じ候事、蟲氣故とばかり心得、捨て置き候事、甚、親の毒を増すと申す者に候、先づ蟲氣に候はゞ、灸治藥を用ひ、募らぬ樣に致すべき事に候。成人

の後も、何ぞ、氣に入らぬ事これあり候へば、物をそこなひ候事、まゝこれあり候。是、全く、我が儘の募り候ゆゑの事に候。器物は損じ候ても、其の通りの事に候へども、後は召仕ひ候者、氣にいらぬ事申すとて、手打に致し、氣がさえ〴〵と致したるやうに、覺え申す樣に成りゆく事に候。

一病氣、根入ふかくならぬ先に、早く直す事に候。

一堪忍の事、身を守るの、第一に候。何事の藝術も、堪忍なくては、いたし覺え候事もならぬものにて候。天道に叶ひ、身の我儘をいたさぬ堪忍、地の理に叶うて、先祖よりの一郡一城をうしなはぬ堪忍、人和を得るも、我が氣隨を出さぬ堪忍、其の外、身體、悉く、堪忍を用ふる事に候。仁は、我が側に召仕ふ者、幷に民、百姓の賞罰を、我が儘に行はず。疎きを惠み、近きをも罰す。是、仁の堪忍なり。君に仕へて、身命を顧みず、一度も約を違へず、是、義の堪忍なり。人の事を先にして、身の事を後にし、起きしより寢ぬるまで、行義正しくする、是、禮の堪忍なり。我に滿てんとして、人を蔑にする事をせず、是、智の堪忍なり。君父に仕へしより、かりそめにも、表裏輕薄をなさず。是、信の堪忍なり。古法を以て我が智を正し、美器、美服、美色に心を動さず。是、目の堪忍なり。美香を好まず。穢はしき匂ひにもをかされず、是、鼻の堪忍なり。雷、又は戰場にて、弓鐵砲の音にも恐れず、先陣に進み、高名を遂ぐる、是、耳の堪忍なり。酒をすぐさず、美味を好まず、是、口の堪忍なり。其の外、手足にも堪忍有りとなり。右堪忍を、一生の間、全く守る人は、大身は、家を起し、國を治む。小身は、身上をおこし、家を治む。堪忍の成る事は、十全にいたら

ねば、家をも、國をも、起す事はならぬものなり。譬へば、十の內、八つ九つ守り、一つ二つ破れ候へば、其の破れし所にて、夫迄の堪忍は、いたづらに成りゆくものにて候。大方の堪忍強き者の、是迄こらへしが、もはや堪忍ならぬと申す事まゝ有る事に候へ共、それも、義によつて破るは、破るとも行かるゝ者に候へ共、多くは、我が智惠短きより、我が儘に落ち入りて、身をはたし家を破り、國郡を失ふ。譬へば、弓を射る者の手前も、能く引き渡し、はなれ口にてゆるみ、又、持出などして、初の能き手前もいたづらに成る樣する者にて候。兎角、堪忍は十全ならねば、堪忍の詮はなき事に候。日本にては堪忍の十全の者は、楠正成一人にて、初より、一向堪忍の氣なしと、言葉にも出し、行ひしは、近世、武田勝賴にて候。夫故、一生、行ひ道に叶はず。先祖より數代の家を失ひ、身を果し候。織田殿は、近世の名將にて、人をも能くつかひ、大氣にて、智勇もすぐれし人にて候へども、堪忍、七つ八つにて破れ候故、光秀が事も起り候。太閤樣には、至つて堪忍つよかりけるゆゑに、卑賤より、二十年の中に、天下の主ともなられ候程の事に候へ共、餘り大氣ゆゑ、分限の堪忍破れ候。大氣程、よき事はなく候へども、夫も、身の程を知らず、萬事花麗に、過分知行、其の外、人に施すは、大氣にてはなく、奢と申すものにれ候。知行、其の外、施す品も、其の分に當るこそ、能く候へ。

一、奢心なく、物事儉約を用ひ、常に、其の程を能く知るを以て、政道正しきといふなれば、下には過分の知行、其の外、給物、其の程々に施し當つるをば、奢る者に引き當てゝ、吝嗇の取沙汰いたし候。古より賢君賢主の、過分に給物、萬事花

麗の行はなく身を愼み、儉約を用ひし事に候。

一惣て、召仕ひ候者に、何ぞ、仕落か、不調法にて、呵り候事を、其の者能く得心いたし、向後改させ候樣に致す事、主人たる者の專一に候。我等、年若より、專、心掛け候故、異見を加へ候者、誤を改めぬ者はなく候。兎角、いかやうにも、人のすたらぬ樣に致し度事に候。先、あやまち候者へ、其の誤ち候事ばかり申し候て叱り候故、心得違ひ致し、主人を恨み候樣に成り行き、夫まで、能々勤め候者も、不足の心出來、ふつとめに成り候て、主人もおろそかの樣に成り候事、全く異見の致しかた惡しき故、人を捨つると申す者にて候。異見の致しかたは、其の者を呼び出し、一人、側に取成し候者を置き、外の者を退け、常よりも、言葉を和らげ、前に、其の方は、箇樣の節手柄を致し、何の節、能々つとめ候抔と、其の者の心を悅ばしめ、其の後、箇樣の不調法、其の方に似合ぬ事と、能々申し聞かせ、くれぐれ、此の以後、相改め、前々の通り、心をつけ、勤め候樣に申し聞け候へば、其の理にふくし、身のあやまりを、隨分相改め候者にて候。主人たる者、一人にても、能き人の出來、如何樣の輕き者にても、科人の出來ぬ事のみを心掛け、身を愼み候事、專用にて候。いかやうの利發の者も、主人の目よりは、行屆かぬ者にて、まして、並々の者の、決して、ぬけがちの事にて有るべく候。其の行屆かぬ所は、主人より、行屆き候樣に心付け、不調法にならぬ樣に致し、召仕ふ事、心掛第一の事に候。召仕ふ者の科に申し付け候者多きは、主人の科に候。

一主人の風儀は、側廻りに召仕ひ候者の風俗、大切に候。上の事の、下へしれぬ樣に有りたき事、取分、氣に入り候者の風俗、心掛肝要の事に候。

其の者一人にて、一家中の風俗變じ、善惡これある事に候。

一治世にも、身を樂に持ち候事は、保養にもあしく、何にても業のなき時は、女色、其の外、いろ〳〵の惡事出來候まゝ、朝起くるより、臥す迄の行儀を定め、毎日、其の通りに致し候事。食事も、常々、美味ばかり給べては、うまきものにあらず。平日の食物、隨分輕き味のもの宜しく、月に兩三度は、美味を給べ候て能きよし承りおよび候。中略いにしへ申し傳へ候。まづ、其の人の行儀を正さんとおもはゞ、平日の起ふしの刻限と、食事の、日々の同じき事、又、多少これあるかにて、行儀の正不正知れ申し候よし、左樣にこれあるべき事に候。惣て、氣丈過ぎて候ては、あやうき事に候。勇氣は、わけて、なくてはならぬ第一の事に候へ共、唯、和らかに、大やうにありたき事にて候。

側に召仕ひ候もの、がさつにこれなき樣に、申し付けらるべく候。

右の趣、能々御申し聞せ、唯、直に、父母兄弟の中、禮儀作法みだれぬ樣に、呉々、御育てなされべく候。右の文は、國へ御渡しおき、成人の後も、能々、相心得候樣、御をしへなるべく候。かしく。

二月廿五日

返す〳〵、くれ〳〵も、國事、隨分御心付けなされ候て、右の通りにさへ御育てなされ候へば、案じ申す事、これなく候以上。

税所敦子刀自を憶ふ

加藤雄吉

嗚呼、税所敦子刀自は、歿り給ひぬ。斯道の爲めに惜しと思ふ念よりも、先づ悲しき情ぞ禁へ難き。

そも、我が、初めて、刀自の名を聞きたま、其の詠歌を見つるは、齢十二三の頃よりなり。我は、幼き時より、斯るかたの話を聞くを嗜みたれど、祖母の君は、折々刀自の世に稀なる身の上を語り給ひ、父君は刀自が往年我家に送り給ひし歌の義を釋きて、敎へ給ひし事ありき。我が十六七の頃なりけり。歌てふものを詠みそめてより、刀自を敬慕する念は、更に加はりつ。一たびは、其の謦咳に接せんと思ひしかども果さず。二十九年の夏、黒田子爵の紹介を得て、初めて、刀自の邸を訪ひしかども、偶々病臥中にて、會話を得ず。携へたる短冊に揮毫を乞ひしのみなりき。それよりは事に紛ぎれて得訪はざりしが、山田清安翁傳を編するに就きて、高敎を乞ふ事あり。昨年九月十日再び、刀自の邸を訪ひぬ。刀自は、快く、我を、其の應接室にひきて、面接せられたり。うち見たるさまにては、五十の齢をさへ重ね給ふまじく、七十餘歳の人とは思はれぬほどなりき。雅容温姿まことに親むべく敬すべき貴婦人なりき。我が辭して歸らんとする時、刀自は、其の著『心つくし』と、自らものせられし色紙、三葉を惠み給ひぬ。十月廿二日再びおとづれし折にも、また、其の著『御垣廼下草』一部を惠み給ひぬ。

我が刀自を見つるは、唯、此二回に過ぎず。されど、我は、十四五年前より、刀自の名を聞き、且つ、其の性行顯才をも知れり。今日しもはからず刀自の訃を聞きて、恰も、我が師を哭するが如き感あるも故なきにあらざるなり。刀自の才德の近代稀に看る所なるは、夙に、世の知れるが如ければ、今更いはずもあらなん。他日、若し閑を得なば、其の詳傳をものする事あるべし。

終に臨みて、刀自が、曾て、我が家に贈られし、

短冊の覺書を左にものすべし。

若君初ての御節句に

ためしなき五月待ち得てあやめ草
　千代の根ざしやなほふかむらん

郭公

ひとりのみ思ひあがりてすぐるかな
　あなうらやまし山ほとゝぎす

我は、飄蓬既に十餘年、幼き時の記臆のまゝなれば、覺え違ひたるも多かるべし。猶、この外にも有りしと、記臆すれど、今は、おぼえず。若君初ての御節句との詞書ある歌は、島津順聖公の公子鐵麿君なり。其の夭死ましましゝ折、從ひて、倶に冥路に、旅立たんとまで、嘆かれし由なれど、此の若君の初めての節句に遇へるをば喜び給ひし君の心のうち、實に、さぞと思ひやらるれ。二首共に、刀自の家集なる『御垣の下草』には出でたらず。（二月六日）

かへらぬくり言（中）

鹽井ふく子

とかくを思ふも甲斐なし。まづ〳〵心をやすませよと、人は云へど心は中〳〵やすまず。ともすれば、人を呼び、便船如何にと尋ぬるもおろかなりや。とするほどに、主人の來りて、さて〳〵、君たちは、幸におはすよ。龍紋丸と云ふ汽船、今日まゐるとの報ありたり。午後四時か、おそくも九時までには、入港すべしと云ふに、さては父君の魂魄のあまがけりて、かう妾等をいそぎ渡さんとし給ふるか。さてもあやしきは、日來、船車によはき妾の、此のたびのみは、少しもよはぬは不思議なり。さては、父君の守り給ふにや。さらど、もはやよみがへり給ふ事はあるまじと、も

しもの思ひも消えかへりてかなし。しかるに、其の日風あらく浪たちて、船は如何にせしや。まてど〳〵來らずして遂にあかつきになり、翌日も來らず、又の夜も、何の船も來らざりけり。もし父君が魂魄のかげるならば、かやうのおぞしき事はあるまじ。さらば、未だよみかへり給ひしかど、もと迷ひの心は、又や起り、電報うちてよと、人にすゝめ、さて如何ならん返事やくるとまつまほどなく、船はどうしてもなきか、金子はあるかとのただ返事にて、よみがへりしの報にあらず。とかくするほどに、又電報來りぬ。ひつぎまつ、どうしても船でこいとなり。さては、さてはどうしてもかへらぬ人となり給へるかと又、今更のかなしさなり。とするほどに、又電報來りぬ。こたびは旅宿に當てゝなり。妾等は誠にをるや居らずや。ただちに返事あれとなり。げに返報せぬを氣遣ひて彼方の心は、又一入なるべし。

其の日の夕刻、龍紋丸入りたりと下婢の知らせに、少しうれしき思ひして、直ちに船にのれば、今日は馬關にとまりて出でぬとの事、伴なる人は、とく知りたれど、せきぬる、我が心をしばしだもやらんために、かうのりしなりと云ふ。もしは熊本丸のさきに來りはせざるや。さる事聞きたらで、など妾に知らせ給はぬとかこつも、あまりに心せきし妾があやまちなり。たとへ賃銀は、空しくするとも、とき方にのらまほしと思ひ、火をもち來りたるボーイに、熊本丸來りたらばのり移してよとたのみたるもおろか、自らも心おちゐず、たちつ、居つ、彼方、此方をながめたり。明日も船はとくも出でず、石炭をつみこみ、やう〳〵晝近くに、いかりを上げたり。風のおとの浪とて、いと高く、船も小なれば、ゆらめく事おびたゞしく、忽ちむ

ねもあしくなりけるを、かんぱんに出よと人の云ふにまかせて、出でたれど、此處には、座する事も能はず、又船夫などのむだ言聞くもうるさく、又や、室に下りて、そのまゝうち伏しぬ。伴なる人は、妾が影の、にはかに見えずなりしにおどろき、もしはとて、とゞろきつゝ室に來り、妾のをるを見て、そのまゝうち仆れて、頭もえ上らずなりにたりとなり。其の夜の十二時とおぼしきに船は、濱田につきぬ。高等中學の生徒にて、此處に一人上陸するがありたり。その人は親の病氣にて呼びかへされしなりと。あはれうらやまし。病氣ならば、なほ逢ふよしもあらんと、又や涙わき立ちぬ。伴なる人は、あまりにくるし、此處にて上らんかと云ふ。聞けば濱田より今市までは、三十幾里とかありて、夜道、殊になれぬ山中より、たとへ、ゑひて、氣絶する事あるも死ぬるまでには至るまじ。よし死ぬとも、早きを、我は撰ばんと云ひつゝ、又やかんぱんに出でゝ見亙すに、しらなみいさましく、熱したる妾には、いと心地よげに感じぬ。もし母君の殘り給はぬ世なりせば、我もまた、此の白浪に誘はれつゝあらましを。むかし小宰相三位の局が、檀の浦に沈みしもかゝる時の心にやありけんと、人のむかしもはじめて思ひ忍ばれぬ。伴なる人も半死、妾も半生、あはれ、むかし、父君と共に行きます旅には、僅かの渡し船にも、おのれがゑふをあはれみて、たけたからなるまでも抱き給ひ、人力車にのるにさへ、自らをともに乘せ給はりしをなど、いよ〳〵むかしを忍びつゞけぬ。此夜は、いたく長き心地して、中〳〵にあけがたきあかつき頃にや、寒くはおはさずやとて、ボーイの火などつぎたしぬ。否、身は熱しぬ。すゞしき風こそ戀しけれ。さても何處に

は來りたる。何時にや、我が上る所へは、幾時頃につくやなどとへば、今、ひゞきなだにかゝりたる所にて、浪も一入、もはや四時、明日の十時頃には、境に達すべし。よべば、浪いとあらく、他の船は皆、濱田にとまりしと聞くなど語りつゞけ、さても大分かぶり給へるよ。しかし、御身は、物食べ給はざると見えて、よひ給ふ事輕しなどなぐさむるも奇特なり。

からうじて境につきぬ。かんはんに出で給へとボーイのすゝむるに、立ち上りて入口まで至りしに、石炭のかほり身にしみて、思はずもうち仆れぬ。とかうするほどに、はしけも來りたり。人に助けられて、やう〳〵のりうつり、程近き宿屋に上りぬ。六日が程、ものも食べず、船、車にゆられたれば、足も何となく地につかず、滊船にかけたる鏡に、ふとうつりたる我がかげ、さながら浪をわざむくばかりの色に見えしかば、かくてはと思ひ、すゝむるまゝに、玉子、二つ、飯一わんをものし、直ちに松江通ひの滊船にのりこみぬ。さて松江に上りて、人力車をやとひ、夜の八九時頃にや、やう〳〵兄の家につきたり。そは東京よりつき給へると、人々の聲に、なづかしき母上の出で迎へらるゝ、御姿見れば、はや御ぐしもけづられて、御なみだに御目もはれ上り給ひぬれど、かう立ち迎へらるゝが、せめてもの心やすさと少しは心もをちぬる。直くに父君が、御すがたを見奉らんと乞へば汝に見せんとて、さま〳〵に用意して今まで置きたるなれば、急がずもあれと云ふ。幾度か、せきて、やう〳〵ひつぎの座敷に伴はるれば、僧の經をよむに母君が手を合す姿の心細くも悲しくも思はれで、之がために、いよ〳〵涙こぼれぬ。げに親を思ふ心にまさる親心、母も兄も、一入の

心づかひ、妾が門司をたちたる後も旅宿へ、電報うつ事四五度、郵船會社にも、はた、他に、もしはとのたよりある方へは、そこにも此處にもうちて、何處に如何なる人に迎へさするも分かるやうに大きなるてうちんに鹽井の二家をいと濃く大きくしるして迎への人を東西に立て、必ずわづらひてつかんなどとて、はやく醫師をも迎へおき、如何にして、迎へん、しかりつけんか、何とせん、母の迎へたるが唯一の策ならんなどかうやうの中にも、母兄が、妾をおはす御心のふかさ、くみ奉るも中〳〵なり。

日來、あまりに、御壯健なりしものから、油斷し奉りしくやしさ。其の日も朝とく、今日は、大町の餅つき、一うでをふるひこんとて、若きものに先きだちて起き玉ひ、二うす三うすのこねどり、誠にいきはひよく、となりの隱居まで、あまりのよきいきはひとて、起き出でゝ、はやし興せしばかりなりきとぞ。やがて幾うすかつき終り、いざ煙草にせんなど、たはぶれさせ玉ひながら、御手を洗がんとして、仆れ玉ひぬ。おどろきかきおこし、何處からたせ玉ひはし玉はずや。たけがは遊ばさずやなど人々のとひまゐらすれは、否、手を洗はんとして仆れしのみとの御聲いつもならざるに、あやしみつゝ、幸ひ隣家は醫師なれは、はやく診察を乞ひ、學校にも人を走らせて、兄を、呼びたるより兄もおどろき走りつき、父君、御心地は如何に何處からたせ玉はずやととはるれば、すや〳〵とねぶり玉ふ御中に、兄の來れるを見そなはして、否、何處もうちも、いためもせず。夜べのみたる酒の少し頭にのぼりたるのみとて、こめかみのあたりを片手にてさすり給ひ、そのまゝすや〳〵とねぶり玉ひぬ。他よりも醫師二名を呼

びたれど、首を傾けしのみにて、物も云はざりしとなり。一人の醫師は、中氣症なれど、靜かにして、頭をひやせと云ふに、一家みなしべまりかへりて、たゞ頭をこそ〳〵とひやしつゞくるのみにて、物の音を忍ぶのみ。兄はかくと聞き、いたくかなしみ玉ひて、さやうの病症にては、もはや身体自由なる事は能はざらん。是非なし、たゞあたゝかくなしまゐらせて講談師にても雇ひ、たゞあけくれをなぐさめ奉るより道はなしとて、涙ながら直ちにわらぶとんをあつらへさせ玉ひたれど、それも、また、死出の旅ねの床となりたるよ。みまかられても、もしは〳〵と御むね、御つむりに手をあてゝは見、あてゝは見たることと幾度か、今も夢のやうなる心地なり。あれ限りの御命とならば、今一言御言葉もかはさんにとて、兄君も惜しみ、語り給ふ。御身もやつれさせ給へど、日來やませ給ふ、御頭りは如何にと心いたまる〳〵ばかりなり。

茶話それ〳〵草（承前）

木崎得立

一つれ〳〵なるまゝに、日暮し數奇屋にむかひて心に移りゆく茶事のよしなしことを、そこはかとなく書付れば、あやしうこそ物くるほしけれ。

一いでや茶人てふ物は、ほしがるべき物こそ多かめれ。井戸の茶碗のみくらひはいともかしこし。竹のふた置の末まで、人間よくの種なるぞかし。何事もなく、とめる人の御有様はさらなり、さもあらぬ人も、又はせはしけなる人も、茶器に富ては、ゆゝしとは見ゆ。其の子むまこ迄

は、はふれにたれるを、時にあひしたり顔なるは、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。茶人斗うらやましからぬものはなし。人には風流のことの様におもはるれど、大有子のかける如く、誠にあるはなし。只かりそめのことに、いきほひ猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。道安のいひけん様に、名聞斗にして、茶の教には違ふらんとおぼゆ。ひたふるの世捨人は、たま〳〵あらまほしき方もありなん。茶は、心深きありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしけれ。物うち入てしたり顔なるは、愛敬なくて憎むべし。言葉の多からんこそうたてかるべけれど、すましたる心にて。一向口をとぢたる人も、本性みえて口をしかるべけれ。器用不器用こそ生れ付たらめ。上手より、上手にも移させうつらさらんや。茶の湯道具も

よき人、財なくなりぬれば、しなくたり、顔にくげなる人にも立ましりて、こひ諂ひをなせるこそ、はいなきわざなれ。ありたき事は古人のまことしき茶の意、又は輕く面白く作りなせる茶器、ふたつみつにて、すましたる人こそいみじかるべけれ。手前など拙からずしほらしくして、拍子あるものから、拍子なきこそ手前はよけれ

○不美曰數奇屋と云名稱は、茶を點るの席なれども、小間廣間水屋庖厨迄一棟の中に備り、式正の茶の湯も此の席にて、無差閊出來得るものを云ふ。井戸の茶碗と云ことは、昔三韓と云し時分、則、今の朝鮮國の内の地名なりとも云ひ又は、井戸對島守、歸朝の際持來りたるにより名付とも云ふ。其の實、難極と雖、井戸と云ふ、一つの手ありて、茶人の不調と云て可ならんか

大有子と云は、小堀遠江守政一侯の庵號なり道安と云は利休の子なり。此の一章を評すれば兼好法師の徒然草になぞらへて、能、茶人の過失を戒めたるものなり。大に、令孃令夫人等の參考にもなりなんか。

爐邊獨語（四）

白松園主人

○禮節

貞丈雜記に、禮節といふ事、貴き人をば謙みうやまひ、いやしき人をばあなどらず、同じ位の人をば、人を先だて、我はへりくだるを禮といふなり。うやまふまじき人をうやまふは、へつらいなりいやしむまじき人を、いやしむるはおごりなり。へつらいもなく驕りもなく、其の身の位相應にして過ぎたる事もなく、及ばざる事もなく、よき程なるを節といふなり。」とあるは、名言といふべし。當時道義地に墜ちて、顧みるものなく、會々、之を談ずる者あれば、却けて迂なりとするが如き世の中には、語るは所詮徒勞ならめど、せめて婦人間になりとも、存せしめたきものなり。

○嫁菜摘み

早稻田、龜戸あたりの田の面に、袖ふりはへたる少女子の、摘草するこそ、いと優には見ゆれ。さすがは花の都にて、春霞立つやたゝぬに、あるは、雪間の若菜を尋ね、あるは谷間に根芹つむなど、いかに興あることならむ。さるを情なきは田舍にてさるわざせんとする者もなし。おのれいにし年、都にありて、兄の病を看護けるとき、ひと日芹をつみきて、兄に勸めばやと、あたりの小溝に美はしき根芹あまた引きけるが、まだいとわかくて、

なにも得知らぬ折のことなりければ、そが根をば悉く切り捨てゝ茎をのみもてかへり、兄に見せけるに、兄はいたく笑ひて、いとをかしの汝がわざや。芹は、殊に根を貴ぶ者にて、清水に滌ぎて、白く總やかなるをば、そのまゝ神にも供ふるなりといひけることもありしが、今は昔となりぬ。その病少しよかりし時、おのれその手を扶けひきて近き廣野に出でゝ、嫁菜を摘みしことのありしは此の頃のことにてありけむ、と思へば、いよゝなつかしくなりきて、いづれの野邊にもあれ、あくがれまほしうなん。

○釣するわざ

學びに倦みしをり〳〵、竿をかたげて、谷の小川に釣するは、いと興あるわざなり。我兄、いたく風流の道を好みて、幼きより、くさ〳〵のことに心を入れて、獨習したりければ、有職故實のことを初めとし、笛に喇叭に、唱歌に詩吟に、繪畫に彫刻に、習字に鐵砲に体操に、さらぬ末技に至るまで、甚だ好みて翫びたるが、唯碁と花骨牌と、歌骨牌と、茶の湯生花とを好まず。其の心常に優美なると、勇壯なるとを好みぬ。されど釣をも好みて、學びのひま〴〵には、よく竿を肩げて出でけるが、之れのみは、甚だ拙くて、魚一尾にても釣り來れるは、稀なりき。こもなか〳〵にをかし。

（完）

歸省日誌（二）

吉野高松

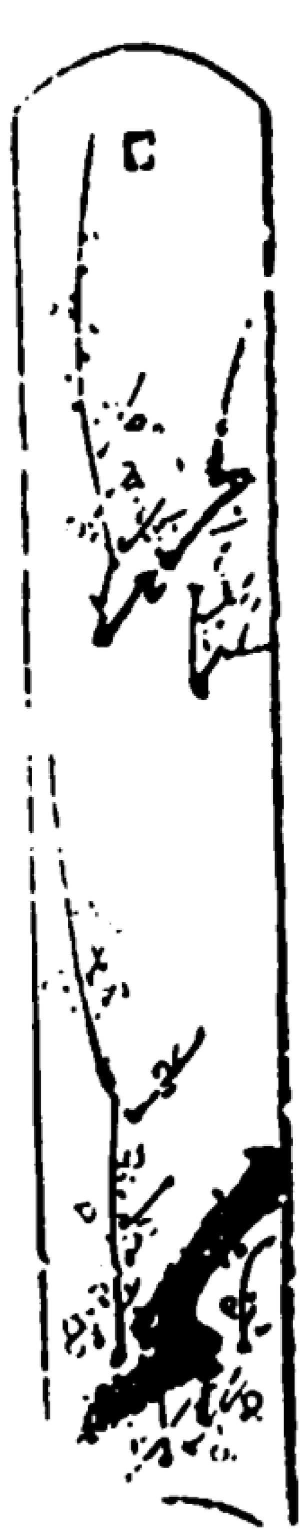
やかで、時計の十二時を告ぐるにおどろかされて、いでやとたちわかれば、一同おしとゞめて、夜もふけたり。殊に雪もまだふかく、道も惡しくて、

日來なれたる人だに困ずるを、しひてゆかば危からむ。といはるゝに、げにもとて床に入りぬ。暫しまどろむともなきに、兄の君の聲ずめり。いとなつかしくて起き出づれど、日來父母の君もまちかねたまへり。いざともにとうながさるゝに、心もおのづと勇みて夜ふかくこゝをゆくまゝに、開きしにも増りて、道いと惡しく、雪消のあとはさながら、泥の海のごとくなるが、夜寒の風に表べのみはこほりて、いとゞゆきなやむ。

磐井川岸にかゝれれば、川の流は清らかにて、久かたの月のかげをやどしたる、いはんかたなし。家路もほどちかくなりぬ。田も畠もけぢめなく、雪のおほへる上をますぐに、兄の君の導かるゝまゝにわたりゆけば、さながら銀の上をたどる心地して、

しろかねをしきてかざれるふるさとに
錦まとはでかへるかなしさ

といふも心のうちなり。やがて家にかへりつきぬ父母の君も起き出で給ひて、柴折りそへて、ともに爐をうちかこむ。いぶせきすみかなれども、一家團欒の樂はなか〳〵にてなん。父君は、よる年波に御身も、いたく瘠せ給へるに、日來わづらへる御目をぬぐひながら、歸へれるかとて、見おこされたる、其の御有さま、御聲ともになにとなう、昔にかはらせたまへるも、いとも心細し。師の君たちより惠まれたる土産などさゝぐれば、母の君もともに、いと〳〵よろこぼせ給ふ。さてこしかたの物語つくべくもあらず。八日の月山のはにかたぶきたるころ枕にはつきぬ。





櫻の詞

かき數ふ四の時はゆけれど、春にしく時もなく、かゞなへて二つの月はたてれど、彌生に比ぶる月もあらずなん有ける。かくしも年に稀なる彌生の空にして、久堅の光うらゝに、科戸の風なぎ春の心よりなりでて、匂ひ榮ゆる櫻の花なん、千々の花に優れにたるは、うべならずや。此の花は言さへぐ唐國には生へずして、空見つやまとの國のはたてに、咲けるこそ、まことなりけれ。大凡四方の國を四つの時にたとふるに、やまとは、天傳ふ日にさいつ國にして、春によれゝば、萬の物皆みづみづしく、人の心うらゝなり、唐國は、久堅の日の經の中つ國にして、夏に當れゝば、千々のわざこちたく、人の心甚しきなり。西の國はかぎろひの日の入る國にして、秋になずらふれば、種々の事おいにて、人の心よみに及べるなり。まかたの國の冬によれらんをも、なずらへてなん知るべき。是等の中に、から人のめづてふ梅は、形の苦しく、桃は色のこちたきなり。やまとの櫻こそ、近く向ふに色淺らにして、名付る詞しもなく、足引の山々、わたつみのさき〲に滿咲ける時は、高き卑しきめでぬ隈もあらざりけれ。これぞこのなつけずゑひゑ、天地のなしのまに〲、治め給びなでしまして、天つ日繼の萬代にしらする、皇大御世の姿を知りぬべきものなりける。いでやもろこしの人の心もて作れるまつろへごとには、梅のごとかぐはしきに似たる匂もあれど、細やかに

苦しげに、桃のごと深き色もありと見ゆれど、うたてこちたきに過ぎぬ。そが上にこゝを撓めかしこをきりつゝ、強て直し敎へんとすれば、民の心堪へずて、遂に靜かなる世もあらず、人の國とすらなり果にけり。こを思ふに、春にしく時もなく、櫻にまさる花もなく、やまとに比ぶる國もなく、神の道に及ぶ道もなきものを、天の益人天つ心のまに〳〵、知らず覺えず、心をやりつゝ、さかゆる花のもとに、遊ばひをるかも。歌ひをるかも。

（加茂眞淵）

ゆだんものがたり

まに生

越後村上藩に何某といふ劍道の達人ありけり。世に恐しと思ふこともなき人なりければ、物忌つつしみなどいふことは、更にせぬ人なりき。今日しも、一年の内に三日、矢の根も見えぬばかり、暗夜にて、妖魔の公行すといふ、其の一日にあたれる日、家人のとゞむるをも聞かで、岩船といふところに釣しに行き、ついでに、知人の誰彼を訪ひ、夜更けて歸途に就きぬ。村上と岩船との間に村上藩の御仕置場あり。樹立もの古りたりといふ程ならねど、薄尾花生ひ茂りて、晝だに見るめ快からぬ所なり。其處にさしかゝりし時、あてやかなる女の首一つ、道の眞中にころがり居たりしが、此方に打ち向ひて、にこやかに打ち笑めり。さてこそ妖怪御座あんなれと、突と立ち寄りて蹴飛せり。ころ〳〵ところがりゆきて此方に向ひたるを見れば、今度は、男の首になりて打ち笑みぬ。また蹴飛しけれど、また、女のにかはりぬ。斯く蹴飛すごとに、女になり男になりして、十餘町が間蹴飛ばされ行きしが、此度は、少し高く飛ぶよと見る

間に顔の大さ四斗樽ばかりなるが口は耳と耳との間に裂けわたり、炎をさへ吹きたてたる大入道となれり。しや、物々しやと眞向より微塵になれと斫りつけゝれど、アト叫びたるまゝ其の姿消え失せけり。可惜むだ骨折らせるよと衣紋つくろひ、悠悠と謠曲などうたひて歸り來れり。家には、女房一人していと氣づかはしげに迎ひ出でゝ、あまり御歸の遲き故、如何ありしかと強く案じつる。湯も沸えてあり、夕飯は食べたまはずや。御酒は如何などいひつゝ顔を打ち守り、御顔色いみじう



惡し。さては、途中にてと問ひければ、然なり。云云の目に遭ひつると、始終つぶさに物語れど、伏目にありて聞き居たる女房、斯様の妖怪にてはあらざりしかと、振り上げし顔は、前の大入道なりけり。おのれッと刀に手をかけし時はやく、妖怪のためにしたゝか頭を打たれ、無念といひし後は何事もおぼえず。朝夙く田畠に往來する人に介抱せられ、目を開きみれば、我が家とおもひしは、畠中の肥小屋なりきとぞ。

斯様の妖怪、世にあるべき筈なければ、是は、かならず戒草にかゝる譚をつくり設けしものなること疑なけれど、然りとては捨てがたき節あり。およそ、如何なる注意ふかき人にても、時としては、油断なきこと能はず。第一は危きをさくることなり。つぎに油断なき様注意するにあり。われはなど萬に高慢なるが如きは、既に沙汰のかぎりなり。この妖怪はなしも、おろかしげなる譚なれど、熟慮すれば、また、多少の益なきにあらじかし。

ねむけざまし

二世　後咲　譯

●不躾なるもの

○帽をかぶりたるまゝ、他人と物語する者。

○他人の家の奴僕婢妾を、悪口する者。

○月障子のすき間より、隣座敷などのぞきみる者。墻壁の隙穴などより、隣家などのぞき込む者。また、となりの談話を立聴するもの。不禮この上なし。

○案内を乞はずして、直に、他人の家に入り来る者。

○人まへにて、なきごとばかりいふ者。

○他人の、つくゑのひきだし、本箱などを、みだりに開くる者。

○膳部にむかひ、主人より、あいさつなき中に、箸とりあぐるもの。他客のいまだ食事をはらざる前に箸を卸すものも、亦、これとおなじぶしつけものなり。

●疎ましきもの

○他人の文籍を、粗忽にくりひろぐる者。

○他人の鞍馬を、遠慮なく乗りまはす者。

○他人の弓矢などとりて、無暗に彈射する者。

○他人の寶物を品評し、不要ぬ評價をする者。

○他人の歌文を、頼まれもせぬに、是非する者。

○他人の家事を、強ひて處置する者。

○他人の闘爭を見て、其に加はる者、これは、彌次馬といひて都會には、ことに多きものなり。

少女の看護婦　おときばなし

第一回　聽雪女史

ある先生の家に、年の頃十五、又、六歳と見えます、少女が二人、何か心配らしい顔して、ひそ〳〵と、相談をして、居ました。すると、其處へ一人の、同じ位な少女が、眞靑な顔して、出てまゐりました。そして、二人に向ひまして「皆さん〳〵大變ですよ。私が今先生の、お部屋の處を通りがかりましたらばね、內には先生が、さも苦しさうな聲をして、呻吟いて、居有るのですよと、言ひますと、二人は、大層、びつくりして「まあ！、何うなすたのでしやう」と、おわくつて、きゝました。すると、私は驚いて、つい近い、お部屋のせい子さんを呼びに參りましたんですよ。するとね、せい子さんが、直ぐに、お部屋へ馳けつけて、入

らしやいましたから、私も後から、追つてまゐりましたの、先生はお醫者樣の、お藥がね、落ちつかないで、ひどくお苦しみになつて、居たのですよ。てつ子さんが、おそばで、冷やしたり一撫でたりして、獨りでおこまりの樣子でしたわ。昨夜までは、そんなにも、思はないで、居た、御感冒が、汗をなさらないから、急に惡くなつて、お熱が三十九度余りに、なつたのですつて。明日の具合で、肺炎にもならねばよいかと、そう仰有つたさうですよ。胸には繃帶で、何だか、大變です。それに、先生は前から、お藥きらひで、入らしやるものですから、何とも仕やうがないと言つて、困つて居有るのですよ。どうかして、お藥なしに、汗する樣な、工夫はないでしやうかしらん。」と、これは、しげ子と申す、少女はなき顔をして、熱心に、はなしました。此所でも、前から心配して、

居ました事ですから、一入しげ子の言葉に、耳をすまして、聞きて居りましたが、其の一人の新子といふ少女は、「しげ子さん、ちよいと、私のね、お父さんが、大のお薬ぎらひで入らして、お母さんが、何時も、困つたのですが。で、すぐ感冒にかゝりますと、長くなつて、熱が内で害をなすのですよ。そんなですから、或日お母さんは、お父さんの、苦しんで居らしやる最中庭へ居りて、そして、一匹、二匹かの、蚯蚓を堀りだしまして、よく土瓶に入れてね。湯のわきかへるのをまつて、その湯むかりね。お飲ませ申しましたのよ。すると、お父さんは、何にも御存じがないものですから、咽喉のかわきまぎれに、早速召あがりましたの。そしてね、お聞きなさいよ。暫くたつと、もう、お夜具が、びしよ〳〵になりまして、汗はね。ぼつぼと、烟りが立つ様に、なつてまゐりまして、

それから直ぐに、快くなりましたと、話しかけました。するとしげ子は、去程より、眼をまる〳〵て、聞いて居まして、その話のすむのを、待ちかねて、「ちよいと〳〵、新子さん、どこに居るのでしよう、私に教へて頂戴よ。さがしにまゐりますわ。そんなよい事はありません。それは、しやうじやありませんかといひつゝ、雀躍して、よろこんで居ました。新子「だつて、あの時は、秋時分でしたもの、今頃は、どうでしやうね。まあ見て來ましやうといひまして、他の二人の少女の顔を見つめてゐました。筆子といふ少女も、そばから、「さうよ。しげ子さん見てまゐりましやう。先生の爲にするのですもの。天道さまも、惠んで下さいますはと、申まして、三人各自に、竹の小な棒を持つて立ちかけました。すると、せい子と申す一人の少女は、一番年がさで御座りましたが。「皆

さんちよいと、おまちなさいな。此のペストとか、赤痢などの、流行する時節に、そんな虫見たようなもの、差し上げて、若しもの事があつたら何うなさいます。新子さんの、仰有るのは、うそだとは申しませんが、およしなさいました方が安心ですよ。私は何うも、悪いと思ひますわと、いひました。そこで、三人は、腹を立ちまして、「せい子さん、決してそんな事はありませんよ。現在新子さんのお父さんが快復なりなすつたと申すんですもの、よいことよ」と。叱りつけますると、せい子は、氣弱いたちですから、早や涙ぐみまして「だつて、幾ら薬でも、ヽハないものを……」と、言つて、居ましたが、三人は、早速縁から、庭へすべり下りました。そして雪の内の、竹の子でなくて、雪の下の蚯蚓を探しに、まゐりました。せい子は、後を見て、居ましたが、やがて手をうつて「よし／＼てつ子さんに、いひつけて置いて、先生に、そのお湯とかを、おのませ申さぬやうにいたしましやうと、馳けつけて行きました。（未完）



花の頃故郷の友に　東久世通禧

われのみの春にはあらずさくら花
　故さとひとの來てもとへかし

夕春雨　高崎正風

山のはに日は傾きてさやかにも
　なりぬるはなに春さめそふる

早蕨　久我建通

花をまつこゝろうれしきはる雨の

ふる野の道にもゆるさわらひ

月夜に花を見て　鍋島直大

照る月のひかりにみれはさくら花
つもれる雪のこゝちこそすれ

春鴈離々　前田利嗣

朝かすみかすむ雲路にまとふらん
はなれはなれに鴈のゆく見ゆ

春田　西三條實義

賤男かなかき春日をたゆみなく
くるゝもしらてかへす小山田

花見ありきて　宮地嚴夫

御園生の花にまされるはなそなき
ところ所をありき見たれと

折花贈人　坂正臣

さきませとはえもいひ難きふせ庵の
軒はのさくらかくさきにけり

桃花　岩崎勝從

梅さくらなき小やま田の桃のはな
はるは林のあるしかほなる

原雉　吉本正方

いたとりを折にときつる片をかの
しもとか原にきゝすなくなり

雨後花　蜂須賀隨子

村雨のはれてのゝちそとはやまに
かゝれる花のくもは見えける

燕　鍋島榮子

さくらちる木の下蔭をゆきかへり
花のあとゝふつはくらめかな

月前花　前田朗子

いつしかと月も出にけり上野やま
花の木かけをゆきめくるまに

漁夫　南郷柳子

しほあひに釣する蜑もなれぬれは
辛きわさとはおもはさるらん

夜春雨　小池道子
咲く花も忘られはてゝねふりけり
あまりしつけきはるの雨夜に

折蕨　松平健子
手にあまるわらひに花を折そへて
かへるゆふべは樂しかりけり

長閑なる日濱邊に出づ　北島以登子
海原はかすみわたりてさくらさく
しまねをめくる舟も見えけり

野遊　鶴久子
うちつれて出し友にもはるかすみ
立ちわかれつゝ遊ふ野へかな

垣若草　小川直子
すみれ草垣ねつゝきにさきにけり
摘みはやすへきうなゐ子もかな

花宴　中島歌子
春山のかすみを汲みておもふどち
はなにも今日はゑひにけるかな

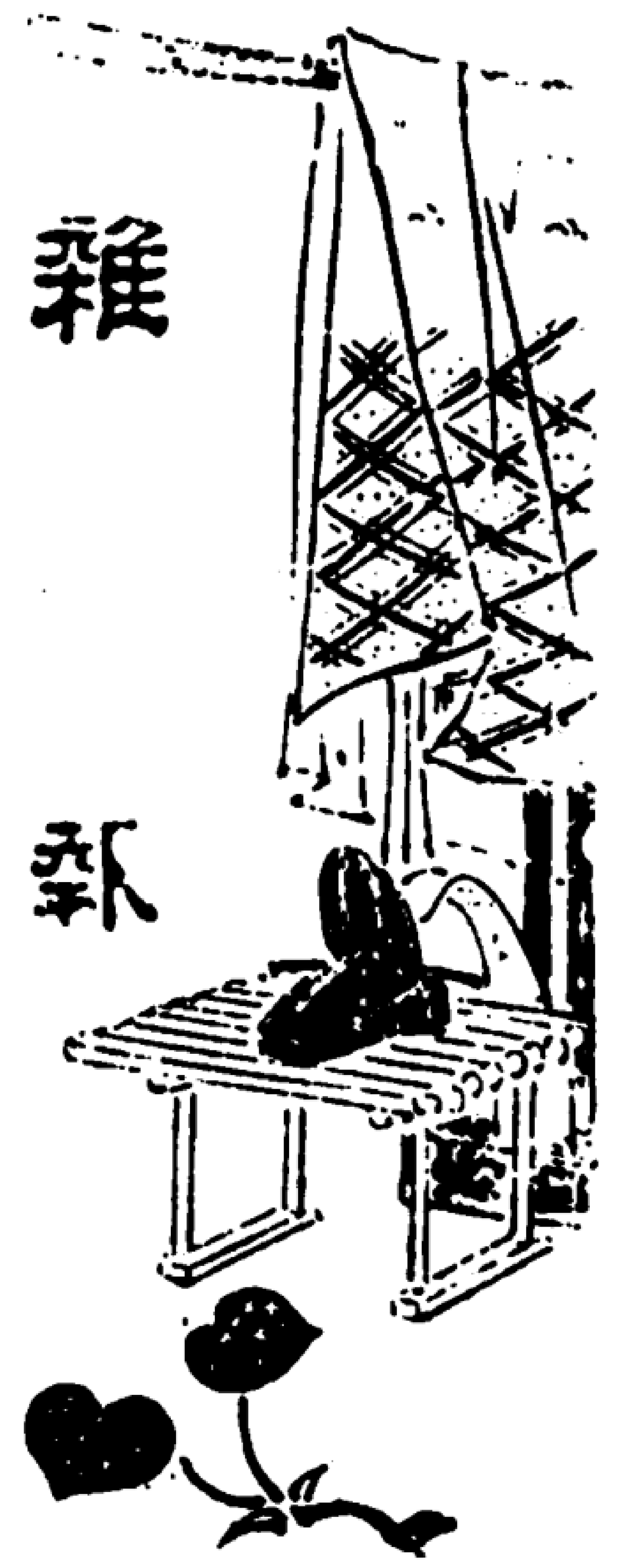
羽前國西田川郡なる加茂の港の濱邊に遊びにける時よめる長歌幷に短歌　秋野庸彦

百たらず、彌生の頃は、山邊には、花をりかざし、海邊には、若女を苅と、人みなのさやめく時に、うつゆふの、こもれる吾も、八重霞、心浮立、思ふどち手たづさはり、水鳥の、加茂の濱邊に、打群て、出立見れば、大舟の渡る、沖邊のさきたつる、浪の穂の上に、高飛や、鳥海山天そゝり、高くのどけく、明石崎、たゞに向へる、荒崎の、庭よく見えて、魚釣舟、いこぎこぎりてさゞれ浪、

磯山方にうなゐ子は、袖ふりはへ、よち子らがこゝらつどひて、かたかゐの、花摘はやす、いつも〱、かくしもかもな、歌しぬび、あかずくらさむ。長き春日を。

白雲のをりゐむかふし沖つ邊はこまもろこしのあたりなるらむ。

雑報



●皇太神宮御棟上式　伊勢神宮臨時御造營に付來る五月十日愈々御棟上の式典を行はる。當日の御儀式は古例に據りて、本宮外瑞垣御門外にて、餅撒の式を行はるべしと聞く。この式は古書に徴するに、工匠の老博士木を引ける、布綱の中程に進み立ちて、御屋根を見上げて『千歳棟』と大聲に呼はゝれば、御屋根にて、一工老『應答』と呼びて大搥をうてば、四工老餅、錢ばら〱と撒き次に『萬歳棟』、『應答』の樹聲と共に、又撒きちらせば下にて『永々德棟』と諸聲あげて三たび御棟を打固め奉るなりとぞ。附て記す。臨時御造營に就きて、頃來造神宮司廳より、奥島造神宮屬、相山、市川の兩技士等出張し、小内匠を督勵しつゝあり。該工期は、本年一月中旬なるべしと聞及しに、更に殿内の御飾附其の他に日子を要し。工事完了の期分九月中旬にあらんとなり。

●御聖德　天皇陛下の御勇武に渡らせ給ふは、夙に臣民の拜承する所にして、最も畏く難有ぎ極みなりけり。いにし十日のことゝかよ、縣知事を九重の宮居に召させ給ひて、畏も、種々の大御言の葉を下し賜はり、御席に列りたる、大臣始め、め

されし縣の長どもは、何れも身に餘まる光榮に感



珊瑚採取の圖（珊瑚閣の二）

泣し居つる折柄、御宴も稍々酣なる頃ほひに主上には、殊更、御氣色を勵まし給ひ、體力修養の必要なるよしを宣はせ出ださせ給ひし後、卿等も、此の花時の好期を幸ひ、遠く、小金井の花に、獵鞍せよとの御沙汰ありければ、一同は過分の面目にいたくかしこみて、頓には、御答言も、言上兼ねて、只、冷汗の背を濕す計りなりしが、斯くてあるべきにあらざれば、西鄕の內相、川口の臣は恭々しく、御受けを申上げたり。よりて、兩臣以下、地方長官三十餘名、岡澤侍從武官長、川口宮內次官、廣幡、大炊御門等侍從、藤波主馬頭併に蜂須賀、西鄕、伊達、戸田、松平、前田、淺野、稻葉、飯田等各式部官二十餘名は、午前六時三十分主馬寮に參集し、轡を駢べて、小金井に赴き、同地にて、午餐を賜り、間もなく引返す筈にて、昨日西鄕內務大臣は、遠乘總裁岡澤侍從武官長は、副總裁川口宮內次官は取締を仰付けられた

り。

●御慶事彙聞

▲御慶事と在地方皇族　東宮御慶事に付ては、伏見、梨本兩宮殿下の如き、地方御在勤の各皇族殿下にも、御上京御儀式に參列相成給ふ由うけたまはる。

▲御慶事奉祝會　東宮御慶事奉祝會は、過日、開會せる評議員會の結果澁澤副會長に依頼し、市内重なる、大會社に向て、出金額の交渉中なりしが、日本銀行、十五銀行、日本鐵道、郵船會社、三井、三菱等は、略、交渉纏まりたるを以て、更に兩三日中に、評議員會を開き、其の以下の募集に付き、協議せんとする筈なりき。

▲美術館の設計圖　御慶事奉祝會の美術館設計圖は、片山工學博士の手許に於て、取急ぎ、調製中なりしが、兩三日中には、悉皆出來す可きを以て、出來の上は、石版摺となし、會社銀行等を初め重なる所に配布する由なり。

▲遞信省官吏の獻品　東宮御慶事に付き、遞信省所屬官吏は、勅任官を十五圓とし、以下、此の割合にて、金額七八千圓を醵出し、紀念品を獻上する筈にて、品種の選定は、秘書課に一任すなりと。

▲御慶事紀念切手　皇太子殿下大禮紀念の爲め發行する由はかねて、本誌記載したりしが、紀念切手は、銀婚式紀念切手と、大さは、殆んど、同一にして、皇室の御紋章菊花と、九條家の定紋藤の丸を以て、其の緣邊に、程好く配置し、中央には、古來皇室、並に、各皇族方の御婚儀の式に用ひさせらる丶三日夜餅を、臺に盛りたるものと二對の御箸を三個の臺に盛りたるものと、柳筐とを印刷したるもの丶由にて、右の品に付き、故實

家の語る處を聞に、三日夜餅とは、「みかのやのもち」と讀妃殿下の御年齢と同數に拵へたることなり。又一重にして、御飾の如くなすこともありて何も、銀製の臺に盛り、又、御箸は、一は銀、一は木製なるものにして、之に鶴の形に、銀もて作りし臺に乘せ、御婚儀の當日より、三日間兩殿下御著をおけさせらるゝの御式なりと。又、柳筐は柳材を以て、三角形のものを、元結樣のものにて筥に組み立て蓋附の文筥なりと。

▲美術館建設に決す　今回の東宮御慶事に就き奉祝の爲め東京府よりし紀念美術館を獻納せんとせしが、維持費、及び、陳列品蒐集費に關し、宮内省の故障あり、一旦中止す可き旨、通達せしが、兩者の間に斡旋するものありし趣は、屢々きく處なりしが、其の結果にや、過日田中宮相と千家奉祝會長の間に、協議整ひ、愈々受納する事に決定したるを以て、過日來、評議員會を開き、寄附金に關する手續を協議しつゝあり。而して、美術館建設の場所は、未だ、決定せざるも、上野公園若くは、日比谷公園の中ならんと。

▲夫婦九子一孫の奉祝　今回　皇室御慶事に付ては、全國の臣民擧つて、滿腔の慶意を捧げまつらんと、目下、夫々準備に怠りなき中にも、原胤昭氏の奉祝こそ、目出度も、亦面白けれ。同氏は、出獄人中職業の得難き、所謂頼り所なき者を收容して、感化保護するを任と爲し、目下、五十餘名の出獄人を養ひ居れり。然る處、今回の御慶事に就き、何か、御慶意を表さんと思ひ居たるに、恰も良し、同氏は、子寶を以て、同儕間に、今郭子儀と呼ばれ、一夫一婦、同母、同胞の生母によりて、九子一孫を擧げたる、大賜の福祉こそ、慶たき一つなれと、茲に一昨日、左の書面を、千家

東京府知事の許に呈したりと云ふ。子孫多かる人人は此の擧に倣ひて、我が　皇室の幾久しく、皇子皇孫の彌榮に、榮え給はんことを祈り奉らんは、誠に御慶事に對する奉祝として、目出たき方法ならんかし。

貴會の御盛擧に賛同仕、家族一同の祝意を表し奉り、金十圓謹贈仕候。御受納被下置候はゞ難有仕合奉存候。特に家族一同の名を以て、奉祝仕候義は、閣下御了知被下置候通り、私共家族は、一生母によりて、強健九十一孫の族を致し居り候義に候得ば、家族揃つて、新御家庭の御繁榮を祝し奉り度、微意に御座候。恐々謹言。

孫	大森義太郎	四女	原みち
三女	原あい	次女	原きぬ
長女大森啓助妻	大森ゆり	五男	原松胤
四男	原竹胤	三男	原梅三郎
次男	原鶴麿	長男	原龜太郎
妻	原きみ		原胤昭

東京出獄人保護事業主管神田南神保町八番地

御慶事奉祝會長
男爵　千家尊福殿閣下

●官國幣社祖神、天皇、皇族、及、功臣を奉祠せるものは、國民教育に缺ぐべからざる資料たるべきものなれば、今こゝに摘記して參考に供す。

天下無比の大珊瑚(珊瑚閣の二)



社名	社格	祭神	祭日	所在國名
伊弉諾神社	(官大)	伊弉諾尊	四月廿二日	淡路國

香椎宮（同）	神功皇后	十月廿九日	筑前國
出雲大社（同）	大國主命	五月十四日	出雲國
霧島神社（同）	瓊々杵尊	九月十九日	大和國
宮崎宮（同）	神武天皇	十月廿六日	日向國
橿原神社（同）	同大御皇后	二月十一日	大和國
平安神宮（同）	桓武天皇	四月十五日	山城國
鹿兒島神社（同）	彥々出見命	八月十五日	大和國
鵜戸神社（同）	鵜茅葺不合尊	二月一日	日向國
白峯宮（官中）	順德及崇仁天皇	九月廿一日	山城國
赤間宮（同）	安德天皇	十月十日	長門國
水無瀨宮（同）	後鳥羽土御門 順德天皇	十二月七日	攝津國
鎌倉宮（同）	護良親王	八月二十日	相摸國
井津谷宮（同）	宗良親王	九月廿二日	遠江國
八代宮（同）	懷良親王	八月三日	肥後國
建部神社（同）	日本武尊	四月十五日	近江國
中山神社（同）	五瀨命	九月十三日	紀伊國

筥崎宮（同）	應神天皇	八月十五日	筑前國
吉野宮（同）	後醍醐天皇	九月廿七日	大和國
金崎宮（同）	尊良恒良親王	五月六日	越前國
熊野神社（同）	素盞嗚命	十一月四日	出雲國
北野神社（同）	菅原道眞	八月四日	山城國
太宰府神社（同）	同	八月廿五日	筑前國
淡山神社（別格）	藤原鎌足	十一月十七日	大和國
護王神社（同）	和氣淸麿	四月四日	山城國
小御門神社（同）	藤原師賢	四月廿九日	下總國
菊池神社（同）	菊池武時	五月五日	肥後國
湊川神社（同）	楠正成	七月廿一日	攝津國
名和神社（同）	名和長年	五月七日	伯耆國
阿部野神社（同）	北畠親房顯家	一月廿四日	攝津國
藤島神社（同）	源義貞	八月廿五日	越前國
結城神社（同）	結城宗廣	五月一日	伊勢國
豐榮神社（同）	大江元就	十月一日	周防國

建勳神社（同）	織田信長	七月一日	山城國
豐國神社（同）	豐臣秀吉	九月十八日	山城國
東照宮（同）	徳川家康	六月一日	下野國
常磐神社（同）	徳川光國齊昭	五月十二日	常陸國
照國神社（同）	島津齊彬	十月廿八日	薩摩國
靖國神社（同）	維新前後殉國者	五月六日 十一月六日	東京
靈山神社（同）	源親房顯家顯信守親	四月廿二日	岩代國
梨本神社（同）	藤原實萬	十月十日	山城國
東照宮（同）	家川家康	四月十七日	駿河國
四條畷神社（同）	楠正行	二月十二日	河内國
唐澤山神社（同）	藤原秀鄉	二月廿五日	下野國
宇部神社（國中）	武内宿禰	四月廿一日	因幡國

●記し置くべき事ども（五件）

▲少年の献品　京都下京區東洞院の野島エイ養子菊江は皇太子殿下の御慶事を祝し奉らんため、丈四尺六寸巾一尺八寸の絹地に蘇東坡の前後赤壁賦及び鶴龜二字を自書して献上せんとす。

▲可感教員　福井縣大野郡下庄村太田尋常小學校訓導松島伊作なる人御眞影奉安所の御安所の御簾及び幔幕を新調せんとて、村内の青年と謀り、夜々藁仕事をなして、二十餘圓を得右の二品を調製す。此の訓導七年間同校に在り、教育熱心家として令聞あり。

▲生徒の譽　兵庫縣播磨國加西郡、九會尋常小學校にては、先月二十六日卒業證書授與式を行ひ、併せて、特別善行者吉田すま子の篤行を表彰したり。同人の嬉しさは、勿論一家の怡懌推して知るべし。尙すま子が受け得たる賞狀左の如し。

賞狀　　吉田すみ

資性温順家庭に在りては能く父母の手助けをなし弟妹を慈み其學校に登るや常に他の兒童に後れて家庭を出づるも遲刻せ

しと少く時として欠席すと雖も家事業忙の爲にして一も私意に出でし事なし然れども尙且學業を精勵し操行學力共こ優等の成績を得て本校を卒業せしは洵に殊勝とす乃て此賞狀を授與し以て其篤行を表彰す

明治三十三年三月二十六日

九會尋常小學校長　古家齊

▲生徒の三幅對　岐阜縣不破郡垂井町垂井尋常高等小學校に於て、客月廿七日卒業及び、修業證書授與式を擧行したる節、勸學生徒三名へ特に皆勤證、並に、賞品を授與したり。其の一人は、同町牛乳商渡邊敬造の四男賢次郎（十三）と云ひ、今回高等科四年を卒業せしが、在學中は、毎朝八時迄に牛乳配達を爲して、後登校し退校後も、家業を勵みつゝ、傍ら學事に心を潛め、茲に高等科を卒業せしなりと、又同町岩田、早苗の長男芳夫（十二）は、高等科三年を卒る迄、七年間曾て、一日の缺勤を爲さず。また、一人なる同町永法寺杉山諦元の長女澄江（九つ）は、尋常科四年卒業に至るまで、一日として、缺席せし事あらじと云ふ。以上三生徒の如きは、皆學生の好模範として、聊か耻づる處無かるべし

●奇特の少年　品行方正學術優等の好成績を以て、尋常小學を卒業したる、福岡縣朝倉郡秋月村前田甚作長男甚太郎は、家貧にして、學資を得るの途なきを以て、日々山に入り、薪木を伐り、之を市に鬻ぎて、學校の授業料に充て、尙父を助て家計を補ふ村内の篤志家は、學資を補助して、更に高等小學へ入校せしむ。

●東京女學館卒業式　先月三十日同館に於て、卒業証書授與式を擧け、神田男爵、館長に代りて、別記卒業者に証書を授與せり。當日來賓には清岡子爵を始め内外の貴紳淑女等、凡そ二百名、頗る盛大なりきといふ。

左に其の次第及び卒業生の名をかゝげん。

卒業生名（イロハ順）

長崎縣	岩瀨八重子	大坂府	勝野壽汐子
東京府	妻木鈴子	長崎縣	隈本ちゑ子
茨城縣	國友たけ子	福岡縣	古閑こさ子
靜岡縣	荒畑もさ子		

以上七名專門科卒業

東京府	伊澤祝子	東京府	石河くみ子
仝	服部りぶ子	石川縣	羽野灼子
仝	堀ひで子	福岡縣	戶土初瀨子
靜岡縣	緒明うら子	和歌山縣	岡田しで子
仝	加藤菊子	茨城縣	加島りつ子
東京府	龜崎いち子	東京府	吉田峰子
群馬縣	高山ちよ子	仝	多田さも子
長野縣	田中たの子	鹿兒島縣	園田峰子
大分縣	津田きた子	岐阜縣	長瀨じづ子
鹿兒島縣	鍋倉榮子	東京府	大倉菊子
茨城縣	大橋なつ子	秋田縣	熊谷濱子
山口縣	草苅のぶ子	山口縣	桝井りつ子
東京府	丸木みつ子	東京府	藤本れい子
山口縣	江村まさ子	仝	榎本きぬ子
北海道	荒川秀子	靜岡縣	荒畑ひで子
岡山縣	坂手のぶ子	福岡縣	城戶もさ子
東京府	三浦末子	滋賀縣	三浦壽江子
仝	柴田環子	栃木縣	白石貞尾子
福島縣	平島福子	北海道	千石文子
東京府	須賀出ひろ子	香川縣	鈴木よし子

以上四十名高等普通科卒業

●喫烟禁止令違犯　かねても報せし如く、丁年未滿のもの丶喫烟を禁ぜられしは、甚喜ばしきことなるが、以來違犯者の續々聞ゆるこそうたてけれ自身は勿論、父兄たちも能く〳〵注意して、あやまちなからしむべきことなり。

●郵便はがき發明者　維納大學教授博士エマヌエル、ヘルマン氏は去一月二十七日を以て郵便はがき發明第三十年紀念祝會を擧行せりといふ。現今文明諸國に於て、使用せられつ丶あるが如き公開郵便はがきの考案は、實に千八百六十九年一月二十六日ヘルマン博士が、始めて發表せる所にして墺國が最初に之を採用し、次ぎて英國獨佛米、及び我日本の採用する所となりて、次で往復はがきの發明となりたるなりといふ。

●遞信省女子雇員採用の成行　過般遞信省に開會せる、一等郵便電信局長、諮問會議に同省よ

り提出せる女子雇員採用の可否は、各局長とも、孰れも、之に賛成せるを以て、遞信省にては、不日之が採用に關する規定を發布する筈なるが、其の採用せる雇員を、如何なる種類の業務に從事せしむ可きかは、尙一の問題にして、既に、遞信省に於て、採用し居る電報調査事務、電話交換手の如きは、女子の職業として、頗る適當なるも、郵便電信の業務は幾分か煩雜の性質を有し、電報調査、電話交換の如き、單純の事務にあらざれば、今日の婦女子が、果して、能く、此の煩雜の業務に服し得るや否は、當局者間の疑問に屬するも、結局郵便電信の發着別、押印、書留、小包の引受、發送、若しくは、切手類賣下の如き事務は、婦人として、適當の職務なれど、其の監督の方法にして宜しきを得ば、却て、好成績を表するを得べし。只其の監督の方法如何は　女子採用の將來を、左



珊瑚生育の圖　（珊瑚圖の三）

右するものあるを以て、其の就業の方法勤務時間の制限、男女混居の取締の如き、大に、注意せざるべからずして、不日發布さる可き、女子雇員採用規則にも、畧是等條件を決定しあり、本年度に於ては、先づ、試驗的採用を行ひ、其の結果に依り、更に明年度に於て、多數の採用を爲す見込なりと。

●第一新潟兒守學校狀況　該校が、其筋の認可を經しことは、既に世人のしる處なるが假設敎授の結果として、認可、日淺きも、本學年末には九名の卒業生を出す事となり、大に慈善家の同情を博することを得たりといふ。

●珊瑚閣　官にて設けられし博物館、動植物園等をおきては、公衆の觀覽物といへば、總べて皆卑猥殺風景のものにして、甚しきは、犬の毛を飴にてかため、是は印度の某地にて捕へたるなどいふ類のみなりしが、曩には水族館の設立あり、次いでこの珊瑚閣設立せられ、悞樂のかたはら學術上の智識を與ふるものあるにいたりたるは甚喜ばしきことなり。珊瑚閣は、紅赤白種等のあらゆる珊瑚を蒐めたるのみならず、珊瑚採取の實況、海底にて生育する實況等を最も巧に顯出し、又ヂヲラマを設けて、珊瑚と他の水族との關係を示ずなど、用意周到なるものなり。同閣内に飾られたる大珊瑚は、彼のマルタの珊瑚閣にて久しく世界第一の名譽を占めたる者に比して、二三位の大にして、小松殿宮下より天下無比の額を下賜せられし名譽のものにて、眞に無界無比の絶品なりといふ。

女鑑歌文目次兼題

五月五日
- 歌　述懐
- 文　試験の成績を姉に報ずる文

右四月廿三日〆切

五月廿日
- 歌　新樹
- 文　同返事

右五月八日〆切

六月五日
- 歌　霖雨の頃亡き人を思ひて
- 文　孝女某の事を記す

右五月廿三日〆切

六月廿日
- 歌　樹間月
- 文　旅行日記の一節（廿四字詰廿行以内）

右六月八日〆切

七月五日
- 歌　婦烈栗女の傳をよみて
- 文　朝顔

右六月廿三日〆切

七月廿日
- 歌　山深瀧聲
- 文　着郷の期日をかねて知らする文（弟妹に）

右七月八日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名
…………
…………
…………

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名
……、……、……。……
……。……、……。……
……、……、……。……

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總べて沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。



教の庭

四月二十日兼題遙見山花

地　周防國熊毛郡佐賀村　田村みち子

中垣のかすみやふれて見渡しの
　山はみながらさくらなりけり

地　但馬國出石町　西川順子

はるかせのにほはざりせは山さくら
　たかねのくもとまかへてや見ん

人　肥後國菊池郡水次村　坂本遊多歌子

うちなびくかすみの奥にはる〴〵と
　やまのさくらはさきにほひけり

（以下原稿到着順）

さくらはな雲かそれかとけふもまた　河野みち子
　こゝろまとはてとほやまのみれ

しらくもの花をかくすとうらみしは　藤井りゑ子
　待ちしやまへのさくらなりけり

見わたせは遠きやまへのさくらばな　森このゑ子
　くもゐとはかりおもはれにけり

まつ風にくもゝかすみもはらはれて　永井さい子
　とほやまさくらあらはれにけり

さしのぼるあさひのかげに遠やまの　高やす子
　ふもとにさけるはなをみるかな

峰に尾にかゝれるくものうごかぬは　田代綾子
　いまさかりなるさくらなるらん

ひとむらの雲のかゝるとみゐたるは　田村多豆子
　とほやまのはのはなさかりなり

よしのやまふりさけ見れはさくら花　村上操子
　たゝひとむらのしらくもにして

くもならぬとほやまのはのさくら花　安原國子
　くもゐとはかりおもひけるかな

ほの〴〵とあくるやまべを見渡せは　森田直子
　はなよりほかのくもなかりけり

みわたせはをちの山邊にひとむらの　小笠原元子
　雲とみるまではなさきにけり

青葉がくれたちそふ雲とみゐつるは　鶴田やす子
　うへのゝやまのさくらなりけり

棚引けるかすみのおびと見るまでに　根田よし子
　咲きいてにけりとふやまのはな

しらくものかゝると見ゐしとほ山は　山下さよ子
　かすみににほふさくらなりけり

のごけさに打出てゝ見れはとほ山は　山方春子
　ゆきと見るまではなさきにけり

山さとははなのさかりになりにけり　稲見きよ子
　尾の上のくものさくらいろなる

大ゐかはわたりかれつゝはろかなる
あらしのやまのはなをみろかな
諸井くら子

み吉野やふもとのさとにたさりきて
はろかにやまのはなも見ろかな
吾妻ちか子

佐保姫のかすみもとけてさほやまの
しろきははなのさけろなろらん
内田さく子

雲と見ねかすみと見ねてさほつまの
花はあやしきものにそありける
大谷津こゝ子

嬉しきははろかに見ねてよしのやま
かせにさくらの香をおくろなり
宮田けい子

そなたよりふきくろ風もにほふなり
をちのやま邊のはなのさかりは
川村孝子

かすみたつはろの山邊のとほければ
いつれをはなとわきてみましや
片山あや子

をちかたの山邊にさけろさくらはな
たか根のくもとまかひけろかな
宮内さし子

あつさゆみはろかなれともさき初し
はなはくもにもまかはさりけり
舘摺ます子

はれやらぬ雲と見ねしははろかなろ
みれににほへろさくらなりけり
河原芳子

はろかにもこころさためし白くもと
みしはたかれのはなさかりかも
井上津佐尾子

白くもかそれかあらぬかさくらはな
よそめあやなきみよしのゝやま
永山豊子

かすみとも雲かとも見ゆとほやまの
さくらやいつかさきいでにけん
岡田はる子

あなたなろ山のふもとにさきならぬ
田中俊子

ゆふ日ははなのさかりなろらん

みわたしのみれのしら雲いつのまに
かせにうこかぬはなとさきけん
伏脇米子

山のはにかゝろかすみの絶よりはろかにみゆろはなのしらくも
屋舗鈴枝子

へたてつろ雲もかすみもにほふらむ
たかれにさほふみよしのゝはな
松田君子

やまのはにたねくかゝろ白くもは
まつにまじれろさくらなろらん
本多繁子

しら雲と見ゆろもうへかやまかひの
さくらのはなのさけろさかりは
福原茁子

足ひきのやまのはさほくあらはれて
のどかにみゆろはなのしらくも
仁保基子

あしひきの山のさくらのさきしより
くもかゆきかとあやまたれけり
徳永茂壽子

たちへだつかすみも今朝は打かをり
をちのやまべのはなさかりなり
徳永廣子

よそ目にはみれの雲かとほのみねて
いまをさかりのやまさくらはな
徳永識子

朝ぼらけ外やまにかゝろしらくもと
みしはさくらのさかりなりけり
小森田輝子

時ならずゆきやつもろとうちみれば
かすがのやまのさくらなりけり
木村菊子

消ねのころたかれの雲とみねつろは
まつのたねまのさくらなりけり
中澤千野子

ほのほのとかすみこめたろ遠やまの
さくらやけふはさかりなろらん
横山寸賀子

打みやるやまのさくらの木のもとに
入りにしひとのすみ家なるらん　横山柳子

春かすみ立ちなかくしそましろなる
とほ山さくらいまだ散らなくに　阪本榮子

やとを出でとほの山べをながむれば
ほのかにみゆるやまさくらかな　新井さよ子

見わたせばかすみかくもかはた雪か
いでこそとはめにはつせのやま　長尾五十子

あし引のやままたやまにゐるくもは
咲きの盛りのはなにそありける　青木たま子

とほやまのみねのさくらを花そとは
たれか見ましやくもとみゆとも　中村きよ子

朝ゆふにうごかぬみねはやまのはに
たなびくゝもはさくらなるらし　宇高松子

玉たれのをちのたかねのしらくもは
いまをさかりのやまさくらはな　佐々小夢子

玉さくらさきのさかりはしらくもの
かゝるたかねとみゑにけるかな　佐々有鄰子

谷やたにみねをへだつるやまのはに
さきのさかりのはなをみるかな　筑紫春子

かぎろひのもゆる空にもしらゆきの
つむかとぞみるやまさくらはな　服部倫子

いざやこらたづねてをみん山のはに
うごかぬくももはなとおもへば　友永卓子

いつまでもうごかぬ雲とおもひしは
とほやまのはのさくらなりけり　那須圓子

はるかなる峰にたなびくはるかすみ　中山康子
はれてにほへるやまさくらはな

ほどとほき山にかゝれるしらくもと
みゆるははなのさかりなりけり　村崎包子

よし野の八重かさなれるしらくもと
みゆるあたりやさくらなるらん　黒田明子

うら〱とかすめる空にしらくもと
みるはよし野のさくらなりけり　黒田美津子

うらゝけき空にもあるをたかねには
くもとまかへてはなさきにけり　内藤順子

目もはるに見ねこそわたれ山のはの
かすみのおくのはなのしらくも　名取よし子

あさひかげのほらむとする山の端に
いろそふる雲やさくらなるらむ　名取正代子

あけほのゝくもとみゑしは遠やまの
みねににほへるさくらなりけり　山田稲子

あたにちる者としれともみることに
こゝろうごかすやまさくらかな　石川らく子

なが〱にめなれし庭に見るよりも
はるかなる山のはなそまされる　石川るい子

うら〱とのほる朝日に見ねそむる
かなたこなたのはなそゆかしき　石川久子

峰ふもとさきみちにけりはるかぜよ
香はさそふともはな散らしそ　石川なゑ子

雲かすみゆきかと見ねてふくかぜに
かをりしらるゝやまさくらかな　駒澤まつ子

さくら花あらしのやまの雲と見ねて
みやこははるのかぜかほるなり　川端まさ子

いづる日のひかりをそねて遠やまに
さきにしはなのさかりしるしも　山代由子

このころはみそらはるかにみし山も
はなのすがたのいちしろきかな　虎口賓子

はるかなる山のあなたにしらくもさ
みゆるははなのさかりなりけり　濱口貞子

遠やまににほふさくらのはなのかげ
こゝろばかりぞかよひゆきける　下田縫子

雲の上にさきつゞきけりよし野やま
はなよりおくもはなとみるまで　石井豊子

峰晴れてふしのすそのにしらくもの
のころさみしはさくらなりけり　河田いし子

あさ日かげほの〳〵にほふ山の端の
かすみのおくにさくらさきけり　山田松雄子

久かたのそらもひさつにうつろひて
くもかさまがふやまさくらかな　山田しむ子

見わせばそらにひさつにみゆるかな
かすみのおくのやまさくらはな　齋藤てつ子

つちなれるさほ山の端はおしなべて
さくらかされになりにけるかな　八木沼里子

しら雲のそれならなくてをちのやま
かすみながらにはなそにほへり　竹村竹里子

さほ山にかゝるかすみさ見ゆるまで
さきもわたれりやまさくらかな　大谷津峰子

たかさごの尾上のわらびなるもよし
さやまのさくらさかりみがてら　加藤數子

春かぜにかすみのころもほころびて
けふこそみつれみれのさくらを　服部萬子

かぜふけどうごかぬくもは花なれや
あけゆくみれのいろぞこさなる　服部正子

あめはるゝ遠のたかねにしらくもの
なほかゝれるやさくらなるらむ　伊東以佐子

ゆけどゆけど遠ははるにしうちむかふ
やまのさくらやちかくみゆけむ　河合縫子

ちかゝらばゆきてみましをさほ山の
みれにかゝるはくもかさくらか　三宅中抜子

きのころ深山のゆきさながめしは
あさ日ににほふさくらなりけり　矢野ふけ子

四月五日女鑑兼題

わかたのしみ

天　中府市山田町　名取正代子

浮世は、憂き世なりとこそ、人ごとにいふめれど、そが中にも、又なき樂しみはあるものぞかし。さて、此の樂しみといふ事は、おの〳〵、心にのぞむ所、さては身のほど〳〵につけて、相同じからぬは、いふも更なる事なりかし。やむごとなききはゝ、まをすもかしこし。おのれら賤しき身にも、なは樂しみとする所、一にして足らず。さても、明けく治る此の大御代に生れあひて、日に實

に榮えゆくらん樂しみは、いはずもあるべし。折ふしにつけつゝ、花鳥風月を友とするも、さる方の樂しみなるべく、あるは遠く物學などにまかりいでたらんが、わくらはに、故郷にかへりて、たらちねのゑましげなる御顏ををがまむなども、樂しみ限りなかるべし。さるを、おのれ、今はたらちねのみもとにつかふまつるからに、唯此の上は、世に處し、事に當りて、つとめいそしみつゝ、をぢなき身にも、得成らん限りは、をみなの女たる本分をつくし、まことの道をつゆふみたがへずして、善き行ひの數々、あらまほしき事こそ、おのが世にふることよなき樂しみの極みにはありけれ。さて暇あれば、古の書を繙きて、見ぬ世の人を友となし、さては折ふしのあはれを、見るまゝ聞くまゝに、歌によみ、文に綴りなどして、よしや堪能と稱へられずとも、たゞ〳〵おのが心をのべ、言の葉にあらはす、道をたどりて、あはれ清原のおもとが草紙の手すさび、紫のおもとが優にやさしき文のゆかりの香をだにとめて、かたばかりもまねばん事、又此の上なき、己が樂しみにこそ。

地　　但馬國出石町　西川順子

世に樂しき事は、いと多し。さるは、霞棚引く春の朝に、花を愛で、花薄招く夕に、さやけき月をながむるなど、何れか樂しからざらん。されば、すみゆく秋の月かげも、時としては、心をいたましむるなかだちとなり、枝もたわゝに咲き亂るる春の花も、折にふれては、憂を增すの種ともなれるを思へば、眞の樂にはあらざるべし。さらば、まことのたのしみは、いかなることにか、家の内絕へず、春風の吹き渡りて、たらちねの親のみこゝろ、なごやかにはらからしもべまで、むつまとく、晝はそれ〳〵のつとめにいそしみ、夜は燈の下につどひて、彼是有益なる物語りなどすれば、言の葉の花も匂ひて、いとたのし。身の程に付けて、萬づ約まやかになしつ。いさゝかにても、餘りあらば、貧しき人々に惠み與ふるは、いかに快くたのしからざらん。ことに貧民院孤兒院など、おとづるゝ時、慈悲のたのしみは、いよ〳〵深く感ぜらるゝならんかし。一日の業にいとまなく、暮れはてし窓の下に、燈火かゝげてたどりながらも讀みもて行く書こそ、いと樂しけれ。さるはひとつには、おのが身を修むるたつきともなし。又ひとつには、をしへ草、おほしたつべきよすがともなればなりけり。ことにひとときはすぐれしは、

長閑けき春の日をまちて、うつくしき花咲かせてんとて、培ひ、水そゝぎつゝ、おほしたつる數へぐさの、いやしげりにしげりゆくこそ、限りなき心のたのしみなりけれ。あはれ、このたのしみは、春の花、秋の月にもまさりてと覺ゆるまゝをかくなん。

人

長野縣北佐久郡布施村　中澤ちの子

何事も後れがちなる身の、況して年頃、山里にうつり住ぬれば、始てそいとわびしかりけれ。日をふるまゝに、今は中々心安ふ、世の交りも、たえ勝ちにて、自ら心さへゆるみゆくこそ、いとうとましけれ。されば晴々しき交際塲に、花をかざゝん心もなく、まして富貴名利も望しからず。かくのみ云はゞ、世を捨てはてし、尼法師のやうに聞ゆべし。されど、望も樂しみもまた、此の内にあるもおかしかり。さるは、我が身こそ、學び淺く、智にうとけれど、せめては、庭の撫子、色も香も、やがてうるはしうさかせんと、さまざまにつちかふ心つくしの、如何に樂しきよ。春の海ともたとへつべき、和氣みち渡る家の內に、此の樂しさの、先に立てれば、富貴榮佑も、いかで及ばん。名利むさぼりて、何にせんと思ひなりぬるも、よそめ如何にかたましく、井の蛙とやそしりわらはれぬべし。

（以下原稿到着順）

村上操子

この世に生れ出たる人は、苦き樂きは、誰もまぬかれぬものなれど、苦しみをのみ、常にかこつぞ、世のならひなりける。されど人には、其のたのしみもなくてやはあるべき。すべて、世の中は、樂しさおもへば、くるしみも、又樂しかるべし。我もまたくさぐさ樂のあるが中にも、春は花をめで、秋は月をながめ、夏は凉しき風をまちとり、冬はふりつもる雪にむかひて、其のをりをりの心の匂ひを、歌によみ、ふみにかき出て、あはれをふかむるなん。こよなきみやび心のたのしみなりける。

河原芳子

朝な夕なに、父母のうるはしき顏をみたてまつるこそ、たのしみの中の樂しみなれや。とのべたまひし人のゆかしさよ。おのが心のゆくまゝに、まことの道にあそびつゝ、とうたひたまひし人のやさしさよ。人もし我がたのしみをいかにとゝはば、この二つの心をもていらへん。花のあそびも、月のまといも、この二つの心をもちてこそいらへん。

まごゝろにたのしみと思ふ事はただ
親につかふる外なかりけり

岡田はる子

世の樂しみは、心々にかはるものにしあれど、學の道をたどるばかり、樂しきはあらじかし。日頃いそしみはげみなば、自づから、誠の道をも知り得べく、或は敷島のみやび心をもおこさしむべし。たらちねのゑませるみ顏、はらからの愛らしき面影

を見て、たのしまんも、只己の誠の心よりいづるなるべく、春の花、秋の月をみて、人しれぬ樂しみを覺ゆんも、みやびの德にあらざるはなし。いかにこがれを積み、高樓を構へたりとも、誠の道を知らず。一家和する事なくば、麗はしく咲き匂ふ春の花、光りさやけき秋の月も、いかでたのしく見得らるべきや。げに、玉よりも、こがねよりも、樂しく嬉しき學の道よ。此の道を置きては、他に樂しきものもあらずなん。

岡田柳子

世に樂しみ多き中に、御恩深き、この大君の下に、朝夕父母の、かはらぬみかげを拜して、春秋をむかふるばかり樂しきはあらじかし。春は深山の、花を尋ねて、櫻のいさぎよき心にならひ、秋は一家打揃ひて、月を眺め、もち月のかけたる事のなしと思へばと、かの道長の君にはあられど、はらから、打興ずるたのしさは、げにいはん方なし。又、夜毎には、いや廣さ、學のうみに遊ぶも樂しく、なべて、綾にしき身にまとひて、いかに富貴なりとも、家に波風立ちさわぎては、何の樂しき事かあらん。主婦はよく家事をとゝのへ、子女は、教を守りて、たのしく月日を過してこそ、四季の眺めも、一しほ床しき心地すなれ。今かく我が樂しみと、かずかずあぐるをうるも、皆治まるみ代のとく、我がすめらぎの御かげにこそと、いとゞ嬉しうなん。

福原董子

世の中の、高き賤しきへだてなく、たのしみといふ樂しみのあるものぞかし。あるは黄金をのみ貯ふるを、あるは高樓玉閣をかまへ、肉を山に脯を林にするなどを、こよなき樂しみとする人はあめれど、妾は、さるたのしみならで、たとひ、身に木綿の衣をまとふとも、邪なる心もたず。まことの道をたどりつゝ、朝夕御氣色美しき、父母君を拜し、親しき同胞と打むるゝたのしさは、春の花よりも、秋の月よりも、心の中常に香ひやかに、清くすみ渡るものになん。

佐々有鄰子

春は、花のあそび、夏は夕顔たなの下にすゞみ、秋は月のむしろの虫のね、冬は雪のながめ、とりどりのたのしみは、世人のたのしみなるべし。妾は、父母のうるはしき、みすがたを拜て、春は若菜のあつもの、夏は西瓜にこゝろふと、秋は柿や、梨の實、冬は、柑子を、ほこやほこ。かげやかけ供て、みこころに、かなへまつらんことを、朝夕のたのしみとなすも、都にとほき、山里のすまひは、佳肴珍味なければ、父母に供ふるたのしみも、世の人には、及ばぬこそ口をしけれ。

阪本榮子

凡、世に生れ、出たらん人は、おのづから、おのがじゝ、樂しみなきはなかるべし。されど、そが中に、老幼男女、各、其の性によりて、樂しみをことにするは、また自然の道理なり。妾は、日々のつとめを了へて、暇あれば、古への文を繙き、見ぬよの人を友とし、新らしき教の文見ては、大御代のめぐみをかしこみ、あるは茶を點じて、父母にさゝぐるなど、こよなき樂しみとなしぬ。かゝる事を、ことごと數書きつゞらんは、をこのわざなれど、幸ひ女鑑に「わがたのしみ」といふ題のあるにまかせて、聊か一二をかきしるしぬ。

原田秀子

世の中に、樂しみといふ樂しみは、種々にして、人々の己が好みのまゝに異なるものならん。されど、わらはが、常にいみじき樂しみとおぼゆるは、錦の衣は飾らずとも、山海の珍味にあかずとも、己が心の行くまゝに、誠の道にあそびつゝ、父母の心にさからはず、敬ひ尊び、弟妹いつくしみ、ちとせをふるも、一家うち

そろひ、睦び語らひて、波風たゝず、何時も、春の彌生のそらの、如くにて、月日をおくるこそ、げに樂しみの中の樂しみなれや。

宇高松子

ふみいる道の八衢に、わけまよひながらも、猶やみ難きは、敷島の道になん。力をもいれずして、天地を動かし、目にみえぬ、鬼神をもなかしむるといふきはにには、かけても至りおよぶべき限りならねど、たゞおのれの、嬉しく悲しくあるは、哀れに感じたる事を、其のまゝに、たど〳〵しながらも、よみいでゝ、後の世のおもひ出も、はた、憂を慰むるよすがもなすこそ、いと樂しけれ。

おのれ不幸にして、一昨年の秋、みめぐみふかき母君を失ひまつりてより後、妹は物學びに、兄上は公の務にて、都にのぼり居給へば、家には年老ひ給へる父君と、我とのみになん。されば、世の人々の如く、海山遠く隔てし、他境に遊びて、しらぬ山水をこころのまゝ尋れ探ることは、いともかたけれども、やさしき兄上は、絶へず、父君の御けしきうかゞひ給ふ消息のはしには、珍らしき都の手ぶりは更なり。旅のおもしろき見、をかしと聞きたまひし事は、繁き務のなかも、かならずこま〳〵と、つけ知らせ給ふ嬉しさ、殊に、それを父上と共によみゆく時の樂しさは、こよなしといふ旅の樂しみにも、いかでおとるべきやは。また每日配達し來る新聞を、父君のこれぞ我が毎夕の樂みなりとのたまふをよみきこえまゐらせて、よろこびきこえ給ふ御顔拜するぞ、いとたのしき。殊にこよなきわがたのしみは、あら金の土もさくといふ、夏にこそあれ。そは休暇得て、久々にてかへり給ふ懐かしき兄上、ろうたき妹をむかへて、朝は露のひぬ間に、へだてなき、兄妹袖打つられて、母君の御墓に詣で、夕にはむつまじき、父子兄妹凉しき夕顔棚の下に、打つどひて、罪なき話、さては昔今の物語して、互によろこびもしよろこばれもせんとおもへは、哀れ待つ身だに、かゝるを。ましで待たるゝ身の、樂しみはいかならんかし。

八木沼里子

春は花、秋は月にと、そのをり〳〵に、ふさはしきたのしみはあれど、朝な夕なに、父母のうるはしきゑまひを拜し、はらからがたみに、いつくしみあひて、つねに、春風の吹きかよひたらんごとき、家庭の中に、おのがじゝ、さるわざをいそしむこそ、げにとこしなへに、かはらぬわがたのしみなれ。

大谷津峰子

世の中に、たのしみといふ樂は、あまたあれど、朝な夕なに、かぞいろの君の、みけしきうるはしう、おはするを、見侍るぞ、又なきたのしみになむ。あるは、五月雨の頃、軒の玉水たゆ間なく、たれこめ居る折しも、郵便といふ一聲に、出て見れば、なつかしき友の許より、ふみおこせたるに、取手もおそしと、開き見る時。あるは、霞もやらぬ、朧月夜に、かほる梅ヶ枝の、主だれのすきもる影を、小夜ふけて、ひとり眺むる時。あるは、外國の學の業、をへ給ひて、かへり來ます兄君を、今やおそしと待ち侍る時などのたのしみは、又一際にて、拙き筆には、なか〳〵つくしがたうなむ。



女鑑總目録　自百一號至二百號

社説

論説

史談

紅塵庵俗禪譯 ● 富岡永洸筆挿繪數圖頗密精細無比極彩色口繪！！ ●

四版

清風高節 秀美優雅

國の獄花（ひとやのはな）

全一冊

總クロース 金文字入

▲菊版美本●▼

正價金五十錢

郵稅金八錢

神氣清潔なる一名士が國事上の冤枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に若悶するに當り高尙優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇内に發揚し最名譽ある儀表の下に最淸廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇警高尙なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる名士少女が淸淨なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

▼▼▼▼▼▼試に本書所載の目次を掲ぐれば

國のひとやの花 目次

發行所 國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

（電話番號新橋八八）

本誌既刷の二萬冊は販布し盡し暫く江湖大方の愛顧に負けり今や增刷成る敢て諸賢の愛讀を辱うせむ事を切望す

臨時 國光 發刊

人心の頽廢、風俗の淫靡底止する所なく邦家の將來洵に痛憂に堪へず冀は此の冊子をして惰眠社會に於ける半夜の警鐘たらしめむ。

◎世界に於ける日本の地位及其現勢◎日本教育の大本
◎此の風俗の頽廢を奈何（以上は本社の勵聲疾呼して憂世慨時の士に質さむと欲する所のものなり）

（劍光）拜金主義と道德●矯世危言●憲政完美の要訣、●師弟の情誼と現行法律●古今教育主義の難點●獨逸海外政策に感あり●日本の國富と人民の負擔●農家の有志者に告ぐ、（以上同憂志士の寄稿にして沈痛剴切なる濟世の忠言也）

（瓊德）東久世伯的勅語要義●蒼海先生偶話仁と智●忠本論●人世禍福の戒路●機言●養心論（以上何れも皆日本思想の本源に遡り君子國人の本領を發揮せむとを主旨とせるもの也）

（鏡影）德川齊昭（硯海）●孝明天皇御逸事●朝倉の大宮柱●太古史の研究につきて●琉球語研究資料、（以上何れも皆國史上の一新光彩）●和歌●詩●文、精を拔き粹を蒐め●八瀬の炭竈、は日本武士の眞面目を描出せる小説なり●昔の塾舍と今の寄宿舍、此の他、畸人傳、名勝誌、佳話一束。

二月十一日紀元節（臨時發刊）に限り金參拾錢（紙數凡二百五十餘頁）本誌定價郵税共一冊金拾錢

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地 國光社

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論

五版

●定價金貳拾錢
●郵稅金四錢
●郵劵代用一割增

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざる也先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著わる本社之を世に公にするや七版忽ちに賣盡し八版の成るを告げたり世間の高評知るべきなり女史又本書を著述し女子處世の心得を説く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺く可らざる良書たり今や四版賣盡し五版成るに至る冀くは世の婦女達及父兄幷に女子教育に重大なる責務ある教育家諸士の一讀を望むや切なり、今左に其の目次の大略を掲げぬ猶詳細は本書に就きて見られよ

目次

從六位內藤耻叟序
故正五位文學博士栗田寛著

天朝正學

菊版美本　全壹冊

定價金參拾五錢　郵稅金四錢　郵券代用一割增

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て曾て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇內無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國に至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戶の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ぶ所を知らしめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

肝付海軍大佐題辭
小笠原海軍大尉序文及作歌
伊東海軍中將手翰
木村海軍大尉校閲
西圭一
野本衛佐美　合著

訂正三版

新案 海軍遊戯法

菊版美本　詳圖入　全一册

定價金貳拾錢　郵税金四錢

（一）日本は海國なり故に兒童の時より先海軍思想を養成せさる可らす
（二）兒童は身体發育の旺盛なる時期なり故に最体育に重きを措かさる可らす
（三）兒童は興味を[illegible]する事甚しきものなり故に機に應して其快樂を正情に導かさる可らす

本書は右三者の目的を達する一助として著者か多年或は兵營に徵し或は海軍將校に質し許多の實驗幾多の考案を積みて幾萬を費し漸編成したるものなり、本書によりて以上の目的を養成せんか世上幾百萬の少年子弟精神乍ち活潑勇壯と化し國家一朝事あるに際しては巨艦に駕し怒濤を蹴り赫々の偉勳を建て優に海國の臣民たる名に負かさる刮目企足して俟つべきなり、世の敎育家父兄諸士の猛省を促す、

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史曩に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處するの方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらるゝかを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からずと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれば此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に說き諭されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目錄

●定價金三十錢
●郵税金四錢
●郵券代用一割増
但一錢切手に限る

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社

三刊

家庭の鑑

菊版美本
全一冊

定價金拾八錢
郵稅金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれは皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれは其情味の津々たる實に小說を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）
發行所　國光社

今般本校に於て私費地理歴史專修科を設け生徒四十名を募集す入學志願者は本年六月十五日迄に當校に願出づべし尙詳細は四月十四日官報廣告欄若くは直接當校に就き承合すべし

明治三十三年四月十四日

女子高等師範學校

至急廣告

本社發刊の『國光』『女鑑』御愛讀の諸君中御轉居の節は往々現住所のみ御通知相成候に付取調上甚だ困却且つ行違ひ遲延等の不都合を生し爲めに御迷惑相掛け候事も有之候間將來は**現**御住所**前**御住所とも詳細に御通知被下度此段廣告致置候

三月廿日

國光社雜誌部

國光、女鑑に關する御照會、御通知、御送金等は以後國光社雜誌部宛に御願申上候

社告

（女鑑毎月五日、廿日、發行）

定價		
一冊		拾錢
六冊	（三ヶ月分）	五拾五錢
十二冊	（半年分）	壹圓
全國無遞送料		

代金	通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通常郵便にて御拂込のもの拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵券代用一割增
領收	別に領收證を出さず金員領收は上直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるる者は別に證書郵送料又は端書封入の事
照會	編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」（會計上に關する件は東京京橋區地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納税の來書は一切受取らず
廣告料	一行（五號活字廿三字詰）金二拾五錢 半頁（一行三十詰）金六圓 一頁（二段六十行）金拾圓 料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年四月廿四日印刷
明治三十三年四月廿五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞

印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地　並木艮雄

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）　國光社

寶石入指環



（一）ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價八拾五圓●乙價七拾五圓●仝眞珠及チパール入甲價參拾柒圓●乙價參拾圓

（二）ダイヤモンド入甲價參拾圓●乙價貳百八拾圓

（三）ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓

（四）ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓
ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價百貳拾圓

（五）ダイヤモンド及キヤツアイ入甲價貳百圓●乙價百七拾圓●仝ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓

（六）ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●仝ルビー及サツノアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓

（七）ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓

（八）眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓

●市外郵送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶玉ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（郵送商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應ジテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ歷々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類
貴金屬美術品商

天賞堂

妙技一等牌賞



天賞堂小川町出張所　東京神田小川町（電話本局二六〇）
天賞堂橫濱出張所　橫濱尾上町五丁目（電話八七六）
天賞堂大阪出張所　大阪心齋橋北詰（電話東七三三）
天賞堂名古屋出張所　名古屋市玉屋町二丁目
天賞堂廣島出張所　廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂熊本出張所　熊本市上鍛冶屋町十番地
天賞堂長崎出張所　長崎市今鍛冶屋町四十番地
天賞堂福岡臨時出張所　福岡市橋口町榮屋方
天賞堂小樽臨時出張所　北海道小樽色內町越中屋方

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）
（印刷所　東京國光社印刷所）